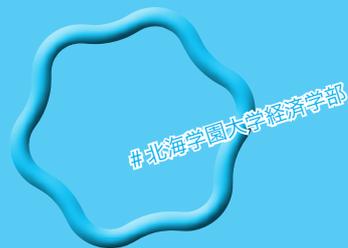


地域研修報告書 2022



Hokkai-gakuen University



1 …………… 2022年度『地域研修報告書』の発行にあたって 2・3 ……… 地域研修1年間の流れ・2022年度研修地一覧
 4~40 …… 地域研修ゼミ報告 (2022年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ) 41 …………… 地域研修報告会

4	1部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ 資源・エネルギーの地産地消の取り組みと地域経済循環 研修地/福岡県みやま市・大牟田市・八女市		24	1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ 当別研修 ロイズタウン駅周辺環境の構想から当別町の活性化へ 研修地/当別町	
5	2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ 室蘭市における産業発展史と将来展望について学ぶ 研修地/室蘭市		25	1部平野ゼミⅠ 白系ロシア人の足跡をめぐる 研修地/函館市	
6	1部上園ゼミⅠ 北海道豊富町の持続可能な産業と地域づくり 研修地/豊富町		26	1部平野ゼミⅠ・Ⅱ 函館市におけるSDGs取組みの調査～3つのセクター市民・ 行政・企業 研修地/函館市	
7	1部上園ゼミⅡ 北海道鹿追町の脱炭素地域づくりの可能性 研修地/鹿追町		27	2部平野ゼミⅠ フェアトレード・SDGsステークホルダーの関わり方の調査 研修地/札幌市	
8	2部上園ゼミⅠ・Ⅱ ニセコ町が目指す地域づくりの先進性 研修地/ニセコ町		28	1部藤田ゼミⅠ 戦争遺産が作った広島のダークツーリズム:未来へ繋ぐ広島 の歴史 研修地/広島県広島市・呉市・江田島市・竹原市	
9	1部内田ゼミⅠ・Ⅱ 芽室町上美生地区のまちづくりとリーダーのライフストーリー 研修地/芽室町		29	1部藤田ゼミⅡ 観光地函館における公共交通の現状と今後について 研修地/函館市	
10	2部内田ゼミⅠ・Ⅱ 函館元町地区のまちづくりとリーダーのライフストーリー 研修地/函館市		30	2部藤田ゼミⅠ・Ⅱ 公共交通から見る函館の現在・未来 研修地/函館市・北斗市	
11	1部大貝ゼミⅠ 北海道十勝地域における小麦関連モデル視察 研修地/帯広市・池田町・音更町・本別町		31	1部古林ゼミⅠ 自然環境の保護と利用一国立公園満喫プロジェクト 研修地/弟子屈町・釧路市	
12	1部大貝ゼミⅡ 田園回帰と農山村地域での起業・継業を学ぶ 研修地/愛媛県内子町・高知県四万十町		32	1部古林ゼミⅡ コウノトリとの共生 研修地/兵庫県豊岡市	
13	2部大貝ゼミⅠ・Ⅱ 地域課題をビジネスで解決する中小企業を探る 研修地/別海町・中標津町		33	2部古林ゼミⅠ・Ⅱ 国立公園における保護と利用の両立 研修地/幌延町・豊富町・稚内市	
14	1部・2部川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ コロナ下における学生アルバイト等 研修地/札幌市		34	1部水野ゼミⅠ・Ⅱ 北海道の四人労働・外国人労働の歴史をたどる 研修地/月形町・当別町	
16	1部佐藤(信)ゼミⅠ コブさっぽろ独自の事業活動を学ぶ 研修地/江別市		35	1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ ふるさと納税制度による地域活性化の可能性と課題 研修地/函館市	
17	1部佐藤(信)ゼミⅡ 「海クリ」参加と学内ペットボトルリサイクルの現状 研修地/札幌市		36	1部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 道南複合農業地域の現状と未来 研修地/厚沢部町	
18	1部中園ゼミⅠ・Ⅱ・2部中園ゼミⅠ 岩見沢市役所における女性管理職登用の実態と課題 研修地/岩見沢市		37	2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 大規模経営集積地域から考える北海道農業の課題 研修地/上士幌町	
19	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 浦幌班 浦幌町における高齢者の買い物機会創出プロジェクト 研修地/浦幌町		38	1部山田ゼミⅠ 上士幌町のデジタル技術を活用した取り組みの調査 研修地/上士幌町	
20	2部西村ゼミ・濱田ゼミⅠ・Ⅱ合同研修 釧路町のDX化の課題-キャッシュレス決済の導入状況 研修地/釧路町	 	39	1部山田ゼミⅡ 沖縄のリゾテックの見学とデジタル化の到達 研修地/沖縄県宜野湾市・沖縄市	
22	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 東川班 東川町の文化・自然を活かした魅力を高めるまちづくり 研修地/東川町		40	2部山田ゼミⅠ・Ⅱ 上士幌町のデジタル技術を活用した取り組みの調査 研修地/上士幌町	
23	1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ 鹿追研修 脱炭素の町 鹿追町のまちづくり 研修地/鹿追町				

2022年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長 石井 健



本年度は地域経済学科が創設されて20周年にあたりますが、地域研修は学科創設と同時に開設されましたので、めでたく今年で20年目となります。地域経済学科を代表する科目としてはじまりましたが、いまや経済学部を代表する科目となっております。フィールドワークを中心にすえた科目は、人の営みや社会のありようを探求する社会科学にとって、座学でえられた理論や知識と現実とが交差し、知が立体化する現場に直接立ち会える重要な機会です。その体験を言語化し、あらためて知へと回収していく作業を通じて、学問は学生たちに血肉化していくことでしょう。

それほど貴重な場である地域研修ですが、今年度も引き続き、コロナ禍の下での実施となりました。昨年同様、現地での研修が本番となる夏休み前から感染が急増し、実施が危ぶまれましたが、今年は行動制限などがかからなかったため、ほぼ予定どおりに現地研修を完了し、年末の「地域研修報告会」の開催と、今回の報告書発行にこぎ着けることができました。これもひとえにご協力いただいたみなさまのお陰と存じます。心から感謝申し上げます。

この地域研修報告書には、昨年度、一昨年度と同様、コロナ禍の下にある研修対象地域の実態と、困難な状況に負けることなく研修に取り組む学生たちの様子が生き生きと綴られています。将来的に、そのこと自体が貴重な記録として価値を持つことでしょう。

この報告書を読んで興味を抱いたみなさんの参加をお待ちしております。



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①～⑥各ゼミによる現地研修。⑦事後学習・報告会準備。⑧地域研修報告会。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



宗谷総合振興局管内
A 稚内市 2部古林ゼミⅠⅡ
B 豊富町 上園ゼミⅠ、
2部古林ゼミⅠⅡ
C 幌延町 2部古林ゼミⅠⅡ

空知総合振興局管内
D 月形町 水野ゼミⅠⅡ
E 岩見沢市 中園ゼミⅠⅡ、
2部中園ゼミⅠ

上川総合振興局管内
F 東川町 西村ゼミⅠⅡ

根室総合振興局管内
G 別海町 2部大貝ゼミⅠⅡ
H 中標津町 2部大貝ゼミⅠⅡ

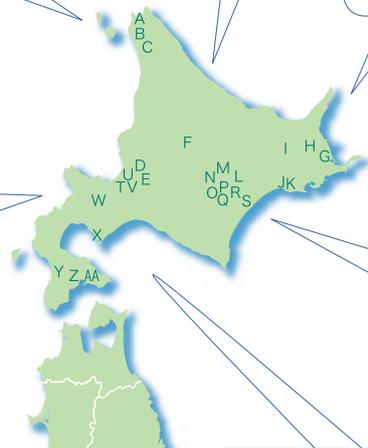
釧路総合振興局管内
I 弟子屈町 古林ゼミⅠ
J 釧路市 古林ゼミⅠ
K 釧路町 2部西村ゼミⅠⅡ、
2部濱田ゼミⅠⅡ

十勝総合振興局管内
L 本別町 大貝ゼミⅠ
M 上士幌町 山田ゼミⅠ、
2部宮入ゼミⅠⅡ
N 鹿追町 上園ゼミⅡ
濱田ゼミⅠⅡ
O 芽室町 内田ゼミⅠⅡ
P 音更町 大貝ゼミⅠ
Q 帯広市 大貝ゼミⅠ
R 池田町 大貝ゼミⅠ
S 浦幌町 西村ゼミⅠⅡ

札幌市 川村ゼミⅠⅡⅢ、
2部川村ゼミⅠⅡ、佐藤ゼミⅡ、
2部平野ゼミⅠ

石狩総合振興局管内
U 当別町 濱田ゼミⅠⅡ、
水野ゼミⅠⅡ
V 江別市 佐藤ゼミⅠ

後志総合振興局管内
W 二セコ町 2部上園ゼミⅠⅡ



兵庫県
豊岡市 古林ゼミⅡ

広島県 広島市・呉市・
江田島市・竹原市
藤田ゼミⅠ

福岡県 みやま市・
大牟田市・八女市
浅妻ゼミⅠⅡ

高知県 四万十町
大貝ゼミⅡ

愛媛県 内子町
大貝ゼミⅡ

胆振総合振興局管内
X 室蘭市 2部浅妻ゼミⅠⅡ

檜山振興局
Y 厚沢部町 宮入ゼミⅠⅡ

渡島総合振興局管内
Z 北斗市 2部藤田ゼミⅠⅡ
AA 函館市 2部内田ゼミⅠⅡ、
平野ゼミⅠ、平野ゼミⅡ、
藤田ゼミⅠⅡ、2部藤田ゼミⅠⅡ、
水野谷ゼミⅠⅡ

▶▶ 経済学部webサイトで、これ
までの研修地や参加者数を、
地図化して掲載しています。



<https://econ.hgu.jp/program/field-work.html>



沖縄県
沖縄市・
宜野湾市
山田ゼミⅡ



1部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 23名



浅妻 裕
経済学科
教授



バイオマスセンタールフランにて (みやま市)

資源・エネルギーの地産地消の取り組みと地域経済循環

研修地：福岡県みやま市・大牟田市・八女市（筑後地区）

●研修目的

電力自由化や再生可能エネルギーの普及政策の一つの背景として、資源・エネルギーの地産地消による地域経済循環を模索する取り組みが各地で進んでいる。これらは人口減少・高齢化などの社会課題解決も展望する。福岡県で取り組まれている事業の実態や課題について調査する。

研修先・日程

- 10月18日 大牟田市石炭産業科学館、三池港
- 10月19日 バイオマスセンター「ルフラン」、みやまスマートエネルギー株式会社、みやま合同発電所
- 10月20日 やめエネルギー株式会社、八女伝統工芸館工芸館

●総括

電力自由化により新電力企業が多く設立されたが、その中でも、電気事業による収益を活用した地域の課題解決に取り組むものを「地域新電力」とよぶ。エネルギーの地産地消を目的とし、広く薄く賦存する再生可能エネルギーの活用とセットになっていることが多い。福岡県筑後地区の「みやまスマートエネルギー」や「やめエネルギー」では、家庭への太陽光発電の設置支援や電力販売事業を行っており、一定数の顧客を獲得することが出来ている。同時に、電力使用状況に基づく高齢者の見守りサービス、地域の食材や六次化商品の販促活動、移住促進の取り組みなどの社会的サービスも提供している。この取り組みは域外への所得の流出を抑止し、地域内経済循環を促進する。今回の研修では、電力調達の仕組みという構造的問題に起因した各事業者の経営上の課題も垣間見えたが、「強い地域づくり」に向けた取り組みが着実に進んでいることが理解できた。なお、筑後地区は、かつては産炭・石炭コンビナートで栄えた地域であった。「ルフラン」における循環資源活用（生ごみのたい肥化等）も含めて、世界的な「脱炭素」の潮流に即した取り組みが着実に行われているという経緯も興味深い。

学生研修記

エネルギー・資金の地域内循環の可能性を学ぶ



増田 梨花
経済学科 2年
札幌藻岩高校出身

今回私たちは、福岡県大牟田市・みやま市・八女市を訪れ、新電力事業などを行っている施設や企業を訪問しました。今回訪れた企業は、共通して地元に着目した事業を行っていたことが印象的です。みやま市のバイオマスセンタールフランでは、家庭生ごみから液肥をつくり無料配布を行い、地域の農業振興に寄与しています。また、八女市のやめエネルギーでは、エネルギーの地産地消、使う分だけをつくるという理念を掲げており、太陽光パネルの設置費用無償化などを行っていました。さらにエネルギー地産地消のために、地元住民の協力・理解が必要だと考え、地元住民向けのイベントを積極的に開催していました。その他訪れた企業も地元に着目した事業を行っていました。このように企業が幅広い活動で地域を引っ張る姿を現地で見ることが出来て、エネルギー・資金の地域内循環の可能性を感じました。そして、事前学習だけでは、今回訪れた企業が地元第一の事業を行っていたことは分からなかったため、実際に現地へ赴き、直接お話を聞くことが出来たのは有意義でした。

福岡県における再エネ事業の特徴と役割



鈴木啓祐
経済学科 3年
札幌北陵高校出身

今回の研修では、主に地域における新電力事業の役割、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを学習しました。研修前までは、新電力事業を行っている会社について、自治体が出資しているか否かという違いでしか、認識できていませんでしたが、実際に福岡に足を運ぶことで、再エネ事業の特徴と目的、地域課題の解決に向けた実際の取り組みの違いを知ることができました。しかし、会社の方々からお話を聞いている中で、どの会社も地域に貢献できる活動をしたいという思いがよく伝わってきて、各社の事業内容や取り組みは様々でも、地域活性化や持続可能な地域の実現といった本質的な部分は同じであることが分かりました。そして、地域活性化のために様々な活動をしている社員の方々が生き生きと働いていることが印象に残っており、訪れた地域そのものに魅力を感じました。また、再エネを扱う上で、社会情勢による価格高騰、電気の安定供給の難しさ等の課題があることが分かり、再エネ事業の難しさを身近に感じる事ができました。

写真①宿泊ホテルにての研修。②バイオマスセンタールフランでの講義。③大牟田市石炭産業科学館にて解説を聞く。④バイオマスセンタールフランでの質疑の様子。⑤みやまスマートエネルギーにて講演を聞く。⑥夕暮れの三池港。⑦やめエネルギーの講師による講演を聞く。



2部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 11 名



浅妻 裕
経済学科
教授



とんとん館にて

室蘭市における産業発展史と将来展望について学ぶ

研修地：室蘭市

●研修目的

室蘭市は、港湾や鉄道といった交通インフラが重厚長大型の産業発展を支えてきた歴史を有する。今年ちょうど市政 100 年、開港 150 年であり、この節目に、改めて室蘭市の港湾・産業を中心とした歴史と現状・将来展望を学ぶ。

研修先・日程

- 11月2日 室蘭市役所、室蘭港現地調査、道の駅 みたら室蘭（白鳥大橋記念館）
- 11月3日 生涯学習センター「きらん」、室蘭市民俗資料館、室蘭市役所にて講演を聞く。

写真①環境科学館にて。②室蘭市役所にて講演を聞く。③室蘭港の改修現場にて。④とんとん館にて説明を聞く。⑤かつての輪西商店街の賑わい。⑥崎守埠頭に設置されるディーゼル機関車。⑦室蘭市役所にて講演を聞く。

DENZAI環境科学館・室蘭市図書館



江本 圭佑
経済学科 2年
札幌新陽高校出身



古田 尚輝
経済学科 3年
札幌新陽高校出身

●総括

当初、市内の無人島（大黒島）の清掃活動とそれを通じた「海洋ごみ」問題に対する理解・考察を深めることをメインテーマとしていた。同時に、日本港湾経済学会北海道部会の協力を得たため、港・港湾地区を中心とした室蘭の発展史や現状・将来展望を把握することも目指した。しかしながら、当日の天候不良で清掃活動が中止となったため、後者を研修目的とした。

研修当日は、室蘭市港湾部から、座学とエクササイズにより、港湾施設等に関する説明があった。現在、製造業が立地している内湾に面した地域は、ほぼ埋め立てによるものであり、これは産業発展過程で港湾が建設されてきたことを意味する。このため、港湾設備等の歴史的なインフラ群は土木学会選奨「土木遺産」にも認定されている。我々は、実際に「旧国鉄ふ頭」など、遺産に認定された箇所も見学し、過去の歴史を感じ取ることが出来た。一方、現在の室蘭市は産業の斜陽化、人口減少という地域課題に直面している。これに対して、港湾における新たな産業創出の動き（洋上風力発電の設備製造、大型クルーズ船の岸壁整備）がみられており、その現場を視察することもできた。市街地におけるインフラの整理・更新が急速に進むなど、将来を見据えた新たな動きがあることを理解できたことも重要な成果である。

学生研修記

室蘭の歴史と未来を学ぶ

現地訪問前に数か月をかけて事前学習を行った。この過程で、室蘭には重厚長大産業で発展したという特徴的な背景があり、室蘭港がそれを支えたことがわかった。また、かつて16万人に達した人口は、エネルギー革命による石炭から石油への需要変化、産業構造の転換により減少したことも学んだ。これらの知識をもとに、実際に室蘭へ訪れ、街並みや人の活気に着目して研修を行った。研修当日は活気あふれるかつてのまちの写真を多く見ることが出来たが、そのころに建設されたインフラ施設の老朽化が進んでいることがわかった。一方で、市民向けの複合的な機能を持つ公共施設「きらん」や、DENZAI環境科学館などの新しい施設があり、非常に住みやすいまちづくりが進んでいた。現場で活躍する市役所の職員の方々も未来を見据えたまちづくりに取り組んでいた。今回の地域研修では、事前学習と現場の両方で興味深い室蘭の歴史と将来展望を学ぶことができた。

「鉄」だけではない室蘭の魅力

私たちのゼミでは、室蘭市を訪れ、市の産業発展史や現状、将来性について学習しました。この研修を通して、分かったことは、室蘭港の歴史の上に、未来の産業が展望されているということです。研修の前は、これまでは「鉄の街」、これからも鉄鋼業に関する活性化を展望しているものと思っていました。しかし、実際に研修に行ってみると、室蘭港が石炭の積み出し港としての役割をもっていたり、人口増に伴う宅地開発を盛んに行ったりしていた多様な歴史に満ち溢れていることが分かりました。さらに、この室蘭港は、カーボンニュートラルの時代に、洋上風力発電設備の製造拠点としての実現を目指しています。鉄鋼業が衰退する中でも、未来の室蘭港には可能性が溢れており、広い視野で眺めることは大切だと実感しました。観光戦略も含めて魅力的な新産業による発展の可能性について学ぶことが出来ました。



1部 上園昌武ゼミI

参加学生数 12名



上園 昌武
経済学科
教授



豊富町長と職員の方々と一緒に

北海道豊富町の持続可能な産業と地域づくり

研修地：豊富町

●研修目的

豊富町は、過疎高齢化問題に直面しているが、それを克服していくためには、どのように持続可能な産業と地域づくりを展開していけば良いのかを問題意識をもって調査に取り組んだ。調査テーマを4つに分け(エネルギー、酪農、観光、教育・子育て)、それぞれに担当を置いた。

研修先・日程

- 8月28日 オートンレイ風力発電所(羽幌町)、大規模草地(豊富町)
- 8月29日 豊富町定住支援センター(河田豊富町長のご講演、町政のヒアリング)、北海道豊富高校(「北海道のSDGsについて」生徒とワークショップ)、川島旅館(観光業と地域づくりの取り組みのヒアリング)、豊富温泉で入浴
- 8月30日 豊富町立兜沼小中学校(生徒との交流)、サロベツ湿原(現地ガイド同伴のツアー)、豊富牛乳公社の工場視察
- 8月31日 サロベツでのびのび育てるママの会でヒアリング、NPOミラココでヒアリング

●総括

本研修では、エネルギーや産業だけではなく、教育や子育てという生活にも着目して幅広い内容を調査した。参加学生は、事前学習と質問票の作成、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたはずである。プレゼン報告は他大学との合同ゼミ(オンライン)でも2回実施し(12/3と12/20)、刺激のある学生研究の交流を行うことができた。また、地元の小中高校生との交流を入れたことは、地域研修の新たな手法になった。そして、この数年はコロナ禍で学生交流が十分にできなかったが、4日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも大きな成果である。

課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。次年度の地域研修では、学術研究に近づけた研修を実施したいと考えている。

最後に、本研修では豊富町役場、事業者や住民の皆さんに大変お世話になった。厚く御礼申し上げたい。

学生研修記

後継者問題の解決に向けた酪農の分業化の重要さ



川崎 いづみ
経済学科2年
札幌新川高校出身

今回の地域研修は非常に充実したものになったと思います。普段関わりのない人から様々な話を聞くことができ、自分が知らなかったこと、多様な考え方や感じ方を知ることができました。私が役場の方からお話を聞いて印象に残っていることは、酪農の分業化を進めているという点です。TMRセンターや酪農ヘルパーなど、酪農家さんの負担を軽減する取り組みがあり、負担が少なくなることで、後継者問題の解決や、酪農家の数を増やしていくことにも繋がるということを学びました。今回の経験をこれからのゼミ活動をより良くすることに繋げていきたいです。

人のつながりの大切さを学ぶ



工藤 悠莉
経済学科2年
NHK学園高校出身

町長や役場の人から、観光業の取り組みや雇用、課題まで多くの話を聞くことができました。餅カフェ我が家さんでは、お店を作ったきっかけや豊富温泉のことを聞き、「こういう場所があったらよかった」を自ら作っていく姿勢を学びたいと思いました。豊富高校では自分が高校1年生の時に大学についてどんなイメージを持っていたかを思い出しました。川島旅館では人とのつながりの大切さを学びました。アトピーで苦しんでいる全国の患者さんに豊富温泉の存在を知ってもらうためにお客さんの声を真摯に聞き、地元のものから特産品を作りテレビでアピールする姿勢に感動し、自分も何のために働きたいかを考えました。兜沼小中学校では鬼ごっこやサッカー、ポスターを使った発表やクイズ形式の紹介、実際に自然を見ながらの兜沼・豊富の魅力紹介、久しぶりの学校給食はどれも楽しい思い出となりました。

3泊4日の地域研修で最初は名前と顔が一致せず不安もありましたが、セミナーハウスの交流もきっかけに4日間良い思い出となりました。

写真①役場担当者とのヒアリング。②サロベツ湿原をバックに。③豊富高校でのワークショップ。④サロベツ湿原でのガイドツアー。⑤兜沼小中学校での交流の様子。⑥豊富温泉のお湯はどれだ(クイズ)。⑦屋外バーベキューパーティ。



1部 上園昌武ゼミⅡ

参加学生数 11名



上園 昌武
地域経済学科
教授



ビンテージスポーツカーを囲んで

北海道鹿追町の脱炭素地域づくりの可能性

研修地：鹿追町

●研修目的

鹿追町は、国の「脱炭素先行地域」に選定され、バイオガスプラント発電などが注目されている。また、ジオパークや然別湖などのサステナブルツーリズムにも特色がある。本研修では調査テーマを3つに設定し（地域づくり、脱炭素、観光）、脱炭素地域づくりの可能性を考察した。

研修先・日程

- 8月16日 鹿追町役場（ヒアリング）
- 8月17日 鹿追町役場（ヒアリング）、ジオパークセンターの視察、然別湖の視察、鹿追町役場（ヒアリング）
- 8月18日 鹿追町役場（ヒアリング）、バイオガスプラントの視察、道の駅の視察

写真①役場担当者とのヒアリング。②ジオパークのヒアリング。③然別湖の絶景。④電気自動車。⑤バイオガスプラント。⑥昼食の屋外バーベキュー。⑦十勝平野を歩く。



●総括

本研修では、バイオガスプラント発電事業だけではなく、サステナブルツーリズムという観光も含めた脱炭素地域づくりの実態と課題を調査した。参加学生は、事前学習と質問票の作成、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたはずである。とくに昨年度はオンラインでの地域研修となったこともあり、ようやく調査の楽しさを体感できたと思う。また、3日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも成果である。そして、プレゼン報告は他大学との合同ゼミ（オンライン）でも実施し（12月3日）、刺激のある学生研究の交流を行うことができた。

課題としては、テーマ毎に関連の学説や理論など先行研究の文献を読んでもらったが、より深い考察を行えなかったことがあげられる。それでも、バイオマス発電事業の地域経済効果の試算（LM3）を試みるなど、昨年度と比べると、学術研究の報告に近づけたのではないかと考えている。

最後に、本研修では鹿追町役場、住民や関係者の皆さんに大変お世話になった。厚く御礼申し上げたい。



ジオパーク施設で説明を聞く

学生研修記

現場に行くことの大切さを学んだ

地域研修を通じて鹿追町は基幹産業である農業を活かしたバイオガスプラントにより臭気対策がなされ観光と農業の共存共栄を実現していることが分かった。また、自営線ネットワークの取り組みにより、防災対応や、剰余熱を活用しチョウザメの飼育や完熟マンゴーの生産を行うことで鹿追町に新たな特産品を生み出していることがわかった。

地域研修を行うことでインターネットや資料だけではわからない実際の体験というものがすごく大切であるということが2泊3日で理解することができた。また、ゼミ生全員としかかわる機会がありとても楽しい思い出となった。

空き家は地域社会の“負債”

今回の地域研修で、鹿追町の概要や地域づくりに関して学び、改めて地元の広尾町と近い状況だと感じたので、広尾町でも行っていけそうな取り組みなどがなかったか考えてみたいと感じました。そして、鹿追町の役場職員の方が、空き家は財産、負債という違った見方をすることが出来ると説明されていて、今まで負債だと考えたことがなかったの、印象に残っています。

また、今回の地域研修があったおかげで、ゼミのメンバーと交流を深めることができ、今後のゼミ活動がよりやりやすく、楽しいものになるのではないかと感じています。初日は大雨で大変でしたが、それも含めて、とても楽しかったです。地域研修に行かせていただきありがとうございました。



油谷 駿介
経済学科3年
栗山高校出身



木村 一稀
経済学科3年
広尾高校出身

2部 上園昌武ゼミ I・II

参加学生数5名



上園 昌武

経済学科
教授



ゼミ室で

ニセコ町が目指す地域づくりの先進性

研修地：ニセコ町

●研修目的

ニセコ町は全国でも地域づくりが著名な先進自治体である。本研修では、ニセコのどこに魅力があり、どのような取り組みが行われているのかを把握することを目的とした。脱炭素地域と観光に着目し、それぞれに担当を置いて地域研修に取り組んだ。

研修先・日程

- 7月19日 ニセコ町役場（脱炭素や観光業の政策のヒアリング）、株式会社ニセコマチ（SDGs住宅開発事業のヒアリング）
- 7月20日 ニセコエリアの観光施設の視察、牧場レストランで昼食

写真①ニセコ副町長からのご挨拶。②役場担当者とのヒアリング。③株式会社ニセコマチでのヒアリング。④ホテルからのぞむニセコ連峰。



●総括

ニセコ町は、1990年代から人口が維持・増加しており、過疎高齢化・人口減少に直面している周辺自治体とは一線を画している。ニセコになぜ人が集まるのだろうか。同町は、情報公開と住民参加を原則としたまちづくりに特徴がある。町は気候非常事態宣言を出し、気候変動対策に積極的に取り組んでいる。国の「SDGs未来都市」に選定され、再生可能エネルギーの普及や省エネ対策（建築物の断熱化）を促進している。また、スキーやラフティングなど国際観光のメッカであり、国内外から多くの観光客が訪れている。そこで本研修では、脱炭素と観光の2つのテーマについてヒアリングと視察に取り組んだ。

本研修によって、参加学生は、事前学習、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたことが成果である。そして、昨年度はオンラインでの地域研修となったこともあり、3年生はようやく調査の楽しさを体感できたと思う。また、2日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも成果である。課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。



ニセコ町の牧場

学生研修記

住民との双方向によるまちづくりの大切さ

ニセコ役場庁舎に入った時、施設の中がきれいで驚いた。ニセコでは住民との交流を大事にしており、年齢問わずバレー大会やリレーなど町での交流が多い。事前協議する際も必ず、住民と行うことを義務化しており、双方の納得によって決めていることがわかった。

高気密・高断熱の取り組みによって大幅な光熱水費の削減がされており、省エネ対策では三重窓ガラスの導入など断熱性強化が一番必要だということに驚いた。CO₂排出の7割を住宅や建築物が占めており、このような取り組みが最善策だと理解した。

宿泊したホテルは、低料金だったが部屋の設備がとても充実していた。朝のバイキングも美味しいものばかりで特に濃厚プリンがよかった。とにかくニセコは自然が豊かで、食べ物新鮮で美味しいということが分かり、また旅行で訪れたいと思う。

ニセコ町は、SDGsの取り組みや持続可能な国際リゾート実現を目指して取り組みが行われていることを理解できた。報告会では、自分たちが地域研修で学んだことをしっかりスライドにまとめて発表できたのでよかった。しかし、見やすいパワーポイントを作るための工夫（画像やグラフ）がもう少しできたのではないかと、また用語を詳しく調べる必要があったという反省点もある。次の報告会で活かしていきたい。

ニセコ町のまちづくりの魅力を知る

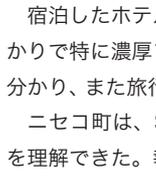
ニセコ町には主に脱炭素、観光、地域づくりについて学んだ。行く前まではニセコと聞いたらスキー場を真っ先に思い浮かべたが、事前学習をするにつれて魅力のある街だということがわかった。現地に行くと、建物は最近できたものが多く役場自体もとても新しかった。脱炭素の取り組みとして新しく建物を建てる時には景観保全や、住民の説明会など環境に配慮した開発、住民参加型の開発が行われていることがわかった。町には外国の方も多く国際交流員が街のルールや質問に対して答えており、国による国際間の摩擦を減らしていると感じた。

ニセコ町は地価も上昇しており、海外からの注目度も高い。これから先も、北海道を代表するまちに発展していくと思うので、地域研修でニセコ町に行き開発や環境に対する取り組みなど様々な話を聞くことができよかったです。



山崎 佑人

経済学科3年
啓北商業高校出身



藤田 和慎

経済学科2年
札幌白石高校出身

1部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数9名



内田 和浩
地域経済学科
教授



上美生農村環境改善センター前で

芽室町上美生地区のまちづくりとリーダーの ライフストーリー

研修地：芽室町

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミⅠ・Ⅱで学んだ質的調査法を用いて、芽室町上美生地区におけるまちづくり（中学校存続のための山村留学やNPO法人上美生等の取り組み）のリーダーへのライフストーリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修先・日程

- 8月28日 大学で事前学習
- 8月29日 講話「上美生でのまちづくりの取り組み」
講師 Aさん（「みんなのお店KAMIBI」ひだまりにて）、上美生地区内のフィールドワーク
- 8月30日 ライフストーリー調査①（Yさん・Aさん）、
グループ学習（調査①の分析）
- 8月31日 ライフストーリー調査②（Yさん・Aさん）

写真①「みんなのお店KAMIBI」ひだまりでの講話（Aさん）。②ライフストーリー調査2（Aさん）。③ライフストーリー調査1（Yさん）。④グループ学習（調査1の分析作業）1。⑤グループ学習（調査1の分析作業）2。⑥上美生地区内のフィールドワーク（上美生中学校）。⑦上美生地区内のフィールドワーク（上美生開拓百年碑）。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

●総括

地域研修では、初日にAさん（NPO法人上美生理事・「ほしぞらプラン会議」代表）から講話として「上美生でのまちづくりの取り組み」の全体像についてお話を伺うとともに、上美生地区内でのフィールドワークをおこなった。そこでは、山村留学の上美生中学校やふるさと交流センター「やまなみ」等の施設や百年以上にわたる上美生地区の開拓の歴史、そして現在の「ほしぞらプラン」による新たな取り組み（「ほしぞらハウス」の設置等）を五感で知ることができた。2日目は、「上美生でのまちづくりの取り組み」のリーダーであるYさん（NPO法人上美生理事長）とAさんへの聞き取り調査を行い、そのライフストーリーを分析した。そして3日目は、それぞれに2回目の聞き取り調査を行った。

学生たちはこれらを通じて、人口減少下の農村集落での地域社会を維持するためのまちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接地域歩きをし、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

阿部 百萌
地域経済学科 2年
大麻高校出身



塩田 銀巳
地域経済学科 3年
滝川高校出身



地域研修を終えて

内田ゼミは8月29日から31日の3日間、芽室町上美生地区で地域研修を行いました。2つのグループに別れ、上美生地区のまちづくりのリーダーお2人にライフストーリー法による聞き取り調査を行いました。

私たちのグループは、かつて農協があった場所で現在「みんなのお店KAMIBI」というお店の運営を行うNPO法人上美生の理事であり、まちづくりの支援を行う方にお話を伺いました。自身が山村留学制度を利用した移住者であるという経験を基に上美生のまちづくりに新しい風を吹かせたことや、地域住民が自分たちの手で自分たちの暮らしをより住みよいまちにしようと行動し、新たな活動を始める行動力の凄さに驚きました。

私たち2年生は来年も上美生で地域研修を行う予定なので、現在行っているライフストーリー調査の分析も来年の研修に活かせるようなものになりたいと思います。

地域研修を終えて

私たち内田ゼミは、芽室町上美生地区の大きな特徴である「行政ではなく、地域住民の自治による主体的なまちづくり」が行われている点に着目して地域研修を行ないました。

上美生地区から中学校やAコープが無くなってしまおうという危機に対して、地域住民たちはどのような考えのもとで、どのようにしてその危機を乗り越えてきたのか。それらのまちづくりの実践における中心人物への聞き取り調査から、地域住民と上美生地区のまちづくりの活動と歴史を調査しました。実際の当事者の方からお話を聞くことで、事前学習からだけでは知り得ない当時の人々のリアリティのある思いや熱意、意識の変化を知ることができました。

今回の地域研修で特に印象に残ったことは、上美生地区の住民の方々は上美生という地域を愛し、大切に思っているということです。その思いが原動力となり、地域住民は自ら立ち上がりまちづくりを実践してきたのだと思いました。

2部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数6名



内田 和浩
地域経済学科
教授



内田ゼミ I・IIの全メンバー

函館元町地区のまちづくりとリーダーのライフストーリー

研修地：函館市

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミ I・II で学んだ質的調査法を用いて、函館市の元町地区におけるまちづくり（西部地区の歴史的景観を保全する活動や元町倶楽部）のリーダー2人へのライフストーリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修先・日程

- 9月4日 大学で事前学習
- 9月5日 山本真也さんの案内で、函館旧市街地（歴史的景観保存地域）見学
- 9月6日 ライフストーリー調査①（山本真也さん・村岡武司さん）、グループ学習（調査①の分析）、函館ベイエリアでの夕食
- 9月7日 ライフストーリー調査②（山本さん・村岡さん）、函館山見学

写真①明治館前で山本さんから説明を受ける。②明治館の中で山本さんから説明を受ける。③歴史的建造物を見ながら山本さんから説明を受ける。④旧野口梅吉商店（「上下和洋折衷様式」の町家）。⑤ライフストーリー調査1（山本さん）。⑥ライフストーリー調査1（村岡さん）。⑦グループ学習（調査1の分析作業）。



●総括

地域研修では、初日に山本真也さん（元函館市教育長・元町倶楽部）の案内で、函館旧市街地（歴史的景観保存地域）を徒歩見学した。そこには、函館開港の歴史の中で現在に継承されてきた歴史的建造物があり、和洋の文化が混在する景観とそれを守り発展させてきた人々の営みを感じることができた。2日目は、その函館西部地区のまちづくり団体である元町倶楽部のメンバーでもある山本さんと村岡武司さん（ギャラリー村岡経営・元町倶楽部）への聞き取り調査を行い、そのライフストーリーを整理した。そして、夜は函館ベイエリアを散策するとともに、函館ビアホールで夕食を取った。3日目は、それぞれに2回目の聞き取り調査を行った。最後に、函館山から市街地を眺めて、函館の街の成り立ちと現状を振り返った。

学生たちはこれらを通じて、歴史的建造物保存等のまちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接街歩きをし、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

菅原 千尋

地域経済学科 2年
苫小牧東高校出身



建物への思いがまちづくりに変わった函館市

私たちは、函館市へまちづくりの主体形成のプロセスを調査しに行きました。一日目は函館元町の散策、二日目以降はまちづくりに関わった方二名にライフストーリー調査を行いました。

ライフストーリー調査では、函館に移住した理由や、元町倶楽部が誕生した経緯、元町倶楽部での活動についてなどの聞き取り調査を行い、まちづくりの主体としての意識がどこで芽生えたのか、どう意識変革したのかを分析しました。私はMさんに聞き取りを行ったのですが、Yさんと比べまちづくりとしての意識は薄く、歴史的な建造物に価値を見出し、人を集めよう、仲間たちと面白いことをしようという活動が、まちづくりに繋がっていたことに驚きました。

この地域研修から、函館市民の歴史的建造物に対する思いや、考え方を聞くことができ、その思いがまちづくりへ繋がるプロセスを分析することができたと感じています。

高岡 健人

地域経済学科 2年
滝川高校出身



函館市での地域研修を通して学んだこと

一日目は、元函館市教育長の山本さんによる案内のもと、函館市の西部地区の一部である「歴史的景観保存地域」の見学を行いました。ここでは、まず都市景観の形成上重要な価値があると認められている景観形成指定建造物として指定されている建物を見学しました。この建物は最初、函館西部警察署として建てられており、その後、建設当初の工法である型枠コンクリートブロック造りを用いて復元された建物であると知りました。また、旧野口梅吉商店という「上下和洋折衷様式」の町家を見学しました。この見学を通して、函館市の街並みの形成や、歴史的保存地域の維持のための活動の歴史などを学びました。

二日目、三日目は、山本さんと村岡さんの2人のまちづくりのリーダーに、聞き取りによるライフストーリー調査を行いました。この調査を通して、元町倶楽部の活動や行政としての活動を通しての意識の変化や、当時の気持ちを学ぶことができました。

1部 大貝健二ゼミⅠ

参加学生数 11名



大貝 健二
地域経済学科
准教授



スタートアップ支援スペース「LAND」にて

北海道十勝地域における小麦関連モデル視察

研修地：帯広市・池田町・音更町・本別町

●研修目的

本研修は、過去10年以上継続してきた十勝ペカリーキャンプ（現：北海道小麦キャンプ）の次の展開を模索する「麦人チェーン事業」のモデル事業（調査）として展開した。

地域経済・産業の担い手をいかに育成し排出していくか、現場から考える研修である。

研修先・日程

- 7月4日 十勝まきばの家、
前田農産食品株式会社
- 7月5日 株式会社 山本忠信商店、
十勝品質事業協同組合、
津島農場、
LAND・十勝財団、
旬菜びさん
- 7月6日 満寿屋商店・麦音

写真①十勝まきばの家ワイナリー。②前田農産、小麦粉贈呈。③成長中のキタノカオリ。④製粉工場十勝夢☆mill。⑤LAND（十勝財団）。⑥麦音店内。⑦満寿屋ヒアリング。⑧十勝産小麦でのピザづくり。



●総括

本研修を通じて、以下の諸点が明らかになった。第1に、十勝産小麦の域内循環（生産・加工・消費）が実現してから10年が経過したが、十勝産小麦に関わるアクター（農業生産者、製粉業者、実需者）の小麦への向き合い方や熱量は変わらず、農産物の生産から加工を通じた高付加価値生産など、より積極的に展開していることである。第2に、小麦の域内加工に取り組み始めた山本忠信商店は、小麦製品の出口戦略に加え、地域内での福祉事業での連携、十勝財団と連携しながら域内起業を活性化させるための仕組みづくりに乗り出すなど、「地域にとって必要なこと」を積極的に事業化している興味深い動きがあった。第3に、コロナ禍において、地域企業間で連帯する取組事例が確認できた。旬菜びさんは「困ったときはお互い様」を前面に出し、店舗横に無人販売所を設置し、売上が落ちた飲食店同士で支えあっている。

最後に、2泊3日で8か所を訪問したが、いずれの訪問先でも熱量の多い経営者が共通して「十勝の食文化を創る」とお話しされていたことが印象深い。改めて地域とは何か、企業間のネットワークとは何かを考える機会となった。

学生研修記

石川 快

地域経済学科 2年
札幌稲雲高校出身



地域研修を通して

私たちは「十勝麦人ツアー」という企画に誘致して頂き、いくつかの地元企業や農家の下でヒアリングを行った。ヒアリングを通し何よりも強く感じたことは、当事者の全員が「どうしたら十勝をもっと盛り上げられるか」を第一に考え行動していることである。業種を問わず自分が十勝に出来ることを考え多種多様な取り組みがなされていることを知ることが出来た。また誰よりも十勝を想い、よりよい十勝の可能性を探る方々と語り合えた経験は大変刺激的で、今一度地域経済について見つめ直す良い機会であった。20年暮らしている北海道はまだまだ知らないことだらけで、自分の知らない十勝の魅力に気付くことが出来た地域研修であった。

地域研修を通して今回学んだ地域の課題や現状はほんの一例に過ぎず、各地域様々な取り組みが行われていることだろう。今回の研修を通して今後さらに多くの地域について知り、地域経済に対する知見をより深めていきたい。

山家 遥馬

地域経済学科 2年
美瑛高校出身



地域研修、十勝を訪問して学んだこと

本研修では、北海道十勝の農家と企業を訪問し農業を軸とした地域経済について調査研究を行った。

研修を通して最も印象に残っていることは、企業間の連携と消費者との距離である。農業生産法人や農業系商社、パン製造販売会社など様々な企業を訪問したが、その多くが「十勝産農産物の価値最大化」を目標に事業を展開しており、その中で他企業との連携や消費者との距離を縮める活動が見られた。生産者・企業・消費者が繋がることで生産者は自らの生産物の価値を感じ、意欲向上や更なる工夫へと発展していくという循環による発展の在り方について学ぶことができた。

また、訪問先の方々は共通して「食文化の創出」という言葉を口にしており、これは、十勝が誇る豊富な地域資源と上述した人々の繋がりから導き出された1つの答えであると考えられる。

今回、十勝を訪問して得た知識を今後の研究へと活かしていきたい。

1部 大貝健二ゼミⅡ

参加学生数8名



大貝 健二
地域経済学科
准教授



シメントシェアオフィス (旧広井小学校)

田園回帰と農山村地域での起業・継業を学ぶ

研修地：愛媛県内子町、高知県四万十町

●研修目的

日本の農山村地域で進む「田園回帰」。単に過疎が進む農村地域に都会から人が移り住むだけではない。いなかの仕事を引き継ぎ継業や、新たに地域資源を活用して起業もみられる。本研修では、いなかビジネスの先進地である内子と四万十でこれらの動きを学ぶことを目的としている。

研修先・日程

- 9月8日 移動
- 9月9日 コミュニティスペースみそぎの里(旧御祓小学校)、道の駅 内子フレッシュパークからり
- 9月10日 道の駅 四万十とおわ・株式会社四万十ドラマ、一般社団法人いなかパイプ、こいのぼりハウス(移住家族からのヒアリング)
- 9月11日 グッドリバー四万十、株式会社無手無冠
- 9月12日 移動

写真①いなかパイプ。②みそぎ小学校。③移住者へのヒアリング。④古城小学校での自炊生活。⑤四万十ドラマ。⑥四万十川。⑦内子フレッシュパークからり。



●総括

過疎化が進む四国地方では、小学校の統廃合が進んでいる。内子町みそぎ地区、四万十町とおわ地区にも廃校になった小学校が存在するが、廃校を活用した取り組みが改めて注目される。みそぎ地区では、地域おこし協力隊で内子町に来た女性に「御祓小学校」の有効活用というミッションを課し、アトリエやワーキングスペースにリノベーションを展開した。そこに内子町の地域資源である楮に魅せられた女性が和紙の生産で起業するなどの動きが見られていた。四万十地域では、旧広井小学校が地域企業のオフィスやワーケーションの拠点に、また旧古城小学校はいなかパイプが展開するいなかインターンシップ研修生の宿泊施設として活用されている。

いなかでの仕事づくりに関しては、(株)四万十ドラマと連携した、いなかパイプの実践が興味深い。「しまんと流域野菜」として有機野菜の再生を進めているが、農業の担い手が高齢化している。仕事は細切れであるが、仕事をつなぎ合わせた働き方を提案し、移住者が引き継ぐなど、新しいなりわいが生まれている。今後検証が必要ではあるが、こうした取り組みが地域の耕作放棄地の減少、農地の流動化に寄与していると思われる。

学生研修記



杉本 のどか
地域経済学科3年
長沼高校出身



佐藤 優樹
地域経済学科3年
北広島高校出身

地域研修を終えて

私たち大貝ゼミナールⅡは、愛媛県内子町と高知県四万十町という中山間地域に位置する町を訪問しました。本研修の目的は、中山間地域の現状を知るとともに、地元企業へのヒアリングを通して、地域資源がどれほどの可能性を秘めているのかを知るといったものでした。私たちは、中山間地域で地域に密着した事業を展開し、持続的発展に寄与する企業に着目し、4つの事業所にヒアリング調査を行いました。どの企業も、地理的条件を活かしながら、地域の魅力あふれる資源を活用した事業を展開していました。中でも、「四万十ドラマ」の畦地さんのお話が印象的で、地域を地域住民とともに持続的に発展させていきたいという想いが感じられたことが印象に残っています。本研修では、文献だけでは知り得なかった中山間地域の現状や課題、そして魅力を自分たちの目で確認することができ、非常に充実した研修となりました。

地域研修を通して

内子町と四万十町での地域研修を経て感じたことは、地域の活性化には、住民や地域企業が地域を活性化させたいと思うことが必要であるということだ。

しばしば地域の衰退の原因となっているものが、住民が主体的に地域に関わっていないことだといわれている。人口減少や高齢化、産業の衰退によって、住民が地域に対して諦めを抱いてしまっているためだ。この点に関して、内子町や四万十町の住民は、地域に積極的にかかわろうとする姿が見られ、地域を盛り上げたいという想いが感じられた。

また、ヒアリングを実施した企業の多くは、地域に必要なものや足りないことを考えて事業展開しており、地域と深く関わり地域の活性化を目指す姿勢がみられた。地域の衰退の要因となる産業の衰退を阻止し、維持・発展させているのだ。

このように、地域の活性化には住民や地域企業の想いが必要であることを踏まえ、具体的な地域の活性化の施策を考えていきたいと思う。

2部 大貝健二ゼミ I・II

参加学生数5名



大貝 健二
地域経済学科
准教授



奥行臼駅跡にて

地域課題をビジネスで解決する中小企業を探る

研修地：別海町・中標津町

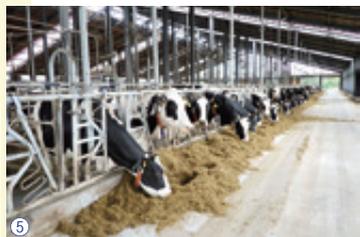
●研修目的

国内最大の大規模酪農地帯である別海町。人口約1万5千人の約7倍である11万頭の乳牛が飼養されている。そのような地域で、大規模酪農の現状を学ぶとともに、地域が抱える課題をビジネスによって解決する中小企業の可能性を探ることが本研修の目的である。

研修先・日程

- 8月17日 別海町役場 「地域経済の概要と中小企業振興」、竹下牧場 「酪農の新業態開発」
- 8月18日 バイオマスソリューションズ 「洗浄液の肥料化」、高橋工業 コンテナホテル・サウナのビジネス展開、エスエルシー 「酪農とICT」、中山農場 「メガファームの現状」
- 8月19日 別海高校 経済学講演会、奥行臼駅跡視察、別海乳業興社

写真①別海町役場。②竹下牧場。③バイオマスソリューションズ。④コンテナホテルKUTEKUN。⑤エスエルシー。⑥奥行臼駅跡。⑦別海乳業興社



●総括

本研修で明らかになった点は、以下のとおりである。第1に、国内最大の酪農地帯とはいえ、個々の経営形態は大きく異なる点である。とりわけメガファーム、ギガファームといった数百頭を飼養する生産法人では、ICT技術が積極的に導入されており、数値に基づいて個体管理が行われていた。第2に、昨今の牛乳の需要低迷に加え、飼料・肥料代が跳ね上がっており、今後大規模酪農の可能性もある状況であった。第3に、地域課題をビジネスで解決する取組に関して、中標津の竹下牧場では、チーズの加工のみならず、ホテルやコワーキングスペースの運営を展開していた。これは、6次産業化による新たな価値の創出に加えて、道東に宿泊施設や出張客が仕事できるスペースがないことが地域の課題であるとの認識に基づいている。同様に高橋工業も、コンテナを活用したホテルを新設し、新たな人の流れ、お金の流れを創り出そうとしていた。また、バイオマスソリューションズでは、産業廃棄物として処理していた大手乳業工場のパイプに蓄積する汚泥（乳の塊）を肥料化した商品を開発していた。地域経済を活性化させるためには、これらの事業をつないでいくことが必要であると感じた研修であった。

学生研修記

新谷 涼太

地域経済学科2年
札幌日本大学高校出身



西村 考貴

地域経済学科2年
札幌稲雲高校出身



地域研修を経て新たに学んだこと、気づいたこと

今回の地域研修を通して多くの気づきがありました。第1に、別海、中標津の印象が、想像していたものとは違っていた点です。私のイメージでは酪農が地域の基幹産業であり、酪農で地域経済を動かしていると思っていましたが、建築業や漁業も盛んであったというのは驚きでした。

酪農という点に関しては、新たな学びが多かったと思います。一番驚いたのは酪農のIT化です。酪農は手作業で何でもやるイメージがあったのですが、ITを使った技術というのが導入されておりデータなどが細かく記載されていました。

今回の地域研修を経て私自身が一番勉強になったのは経営者さんたちの姿勢です。今回の研修で様々な経営者の方々にお話を聞く機会がありましたが、皆さん共通しているところは、地域課題を解決するために何が出来るか常に考え、様々なことに挑戦していることだと思います。その姿勢は私も学ばなければならない点だと思います。

地域研修で学んだこと

私たちの2部大貝ゼミで行った地域研修では、別海町・中標津町の現状と多様化している酪農、地域課題の解決を目指す企業の動きを見てきました。まず最初に、別海役場では別海町の現状を説明して頂きました。竹下牧場では、酪農だけでなく「牛宿」といったような宿泊施設などの経営の多角化、中山農場、エスエルシーでは、自動搾乳ロボット・生乳分析装置などを取り入れたスマート酪農の実践、ICT技術の導入を行っていました。高橋工業ではコンテナビジネス、バイオマスソリューションズでは汚泥をリサイクルして有機肥料を作っていました。

この地域研修を通して、酪農、建築、リサイクルといったようなそれぞれの企業を見てきたが、共通して地域をどのように活性化させていくかを分析し、様々な事業からどう発展に繋げていくかを考えていました。実際に別海町・中標津町に訪れてみて、地域の課題を解決し、それを地域発展に繋げていくのは難しいことであると感じる事が出来ました。

1部・2部 川村雅則ゼミ I・II・III

参加学生数 1部21名・2部10名



川村 雅則

経済学科
教授



1部ゼミメンバー

コロナ下における学生アルバイト等

研修地：札幌市

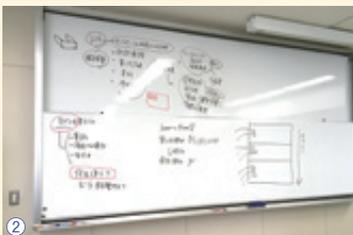
●研修目的

聞き取り調査とアンケート調査を通じて、コロナ下3年目における大学生のアルバイトや学費負担・奨学金利用など（以下、学生アルバイト等）の現状把握につとめた。また今年度は、調査の最終的な取りまとめ結果だけでなく、調査・研究活動における「思考」の過程や「作業」の過程についても、インターネット上で随時配信を行った。調査の失敗体験についても、貴重な情報と考えてのことである。

研修先・日程

- 前期
- ・基本的なワークルールを学ぶ。
 - ・学生アルバイト等を題材にしながら、新型コロナウイルス（以下、コロナ）の下での雇用や生活保障のあり方について学ぶ。
 - ・「北海学園大学 学生アルバイト白書2022」（以下、「白書」）の作成を念頭において、学生アルバイト等の調査の準備に取りかかる。まずは、6月中旬から7月下旬にかけて聞き取り調査を実施。
 - ・今年度の「白書」は連載で随時配信することを決定。第1報となる「白書(連載1)」を7月17日に配信。
 - ・沖縄国際大学の渡久地朝央ゼミとの交流を決定。7月末にオンラインで調査の中間報告を交流。なお今年度は、日本学生経済ゼミナール大会には参加しなかった。
- 夏期休暇
- ・1部学生を中心に、聞き取りの結果に基づきながら、アンケート調査の準備を開始。
- 後期
- ・アンケート調査を実施。
 - ・渡久地ゼミと現地（沖縄国際大学）で交流（10月3日）。
 - ・労働経済論の授業で調査結果の中間報告会を開催（10月28日）
 - ・アンケート調査の結果を取りまとめた「白書(連載10)」を完成。

写真①聞き取り調査の整理（2022年8月30）。②同、作業の指示。



●総括

(1) 6月中旬から7月下旬にかけて、知人・友人を対象とした聞き取り調査を行い、9月29日から10月5日にかけて、ウェブアンケート調査を実施した。有効回答は、前者が計39人（1部29人、2部10人）で、後者が431人（1部289人、2部142人）である。

調査の問題意識は、(a) 初期に比べると落ち着いたようにみえる学生の就業（アルバイト）機会・勤務時間数の確保状況を明らかにすること、とくに対面授業が再開されたことでアルバイトをしづらくなったという声が聞かれたので、その点などを尋ねた。(b) シフト制勤務に関する問題や残業時の賃金支払い単位に関する問題など、ワークルールに反するような経験の有無や実態を尋ねた。(c) 過去の調査内容を改善し、学費負担や奨学金利用の状況をより詳しく把握した。以下では、アンケート調査の結果を幾つか紹介する。

(2) アルバイト就業：今年度から対面での授業開講が原則となった。対面授業が再開した際にすでにアルバイトをしていた学生を対象にして、対面授業再開にともなうアルバイトの勤務状況や収入の変化を尋ねたところ（複数回答可、図表1）、「勤務回数や勤務時間数を減らした」、「勤務時間帯や曜日を変更した」がそれぞれ4割弱を占めるほか、「アルバイト収入が減った」が4分の1、「アルバイトを辞めたり変えたりした」も1割みられた。

週の勤務時間数は（図表2）、緊急事態宣言による営業時間の短縮や行動制限が要請されたコロナ1、2年目に比べると、回復しているようにみえるものの、コロナ前との比較については別途検討が必要である。

アルバイト先でのワークルールの遵守状況を尋ねた。コロナ1、2年目の調査では休業手当の不支給状況を明らかにしてきたが、今年度は、賃金（時間外労働、残業）の支払い単位を尋ねた（図表3）。「1分単位で支払われている」のは4割にとどまった。「わからない」が21.2%、「15分単位で支払われている」が19.6%である。図表は示していないが、自分の現在のアルバイト先で学生ア

学生研修記

アンケート調査を終えて

私たちのゼミでは、新型コロナウイルスが徐々に回復してきた今、学生のアルバイト状況はどうなったのかを明らかにするためアンケート調査を行いました。特に学生アルバイトの働く目的や働き方はどう変化したのか、勤務時間は変化したかに重点を置きました。

調査の結果、オンライン授業から対面授業中心の生活になったことで勤務時間帯の変更や勤務回数を減らした学生が多くいることがわかりました。またアルバイトの時間が減ったことで遊びや趣味に使うお金は減ったが生活に困るほどではない回答者が多くいる一方で、経済的に苦しいためかけもちをしている学生も少なからずいました。学生アルバイトが回復したかは、コロナ禍前と今の学生の勤務時間を比較して検討してみました。結果、コロナ禍前の学生のほうが労働時間が長く、完全に回復したとは言えませんでした。

アンケート調査やゼミで学んだこと

私たちのゼミでは、北海学園生を対象として、学生アルバイトにおける勤務時間や働き方、シフト、アルバイトをする理由、収入の使途、学費負担や奨学金利用、ワークルールや勤務問題などを聞き取りとアンケートで調べました。それぞれの調査で得た細かい結果を、一人一人分析し、沢山ある情報を端的にまとめました。

調査結果の中で1番記憶に残ったのは、賃金の支払い単位で、約4割しか原則1分単位でアルバイト賃金が支払われていなかったことです。実際に私も15分単位の支払いを経験し、不満を感じたことがあります。調査前は、自分の働き方にはワークルール上の問題はないと思っていましたが、調査の結果とワークルールを比べることで問題点を見つけることが出来ました。また、ゼミだけでなく一緒に履修する労働経済論でも、様々な労働問題について学べるため、将来職に就く際にとても役に立つと思います。



上川 結衣
経済学科2年

小樽潮陵高校出身



長尾 桃花
経済学科2年

札幌北陵高校出身



2部ゼミメンバー

図表1 対面授業が開始されたことともなう勤務状況や収入の変化【複数回答可】

	人数	割合
合計 [単位：人・%]	298	100.0
勤務回数や勤務時間数を減らした	111	37.2
勤務時間帯や曜日を変更した	112	37.6
アルバイトを辞めたり変えたりした	28	9.4
アルバイト収入が減った	72	24.2
むしろ勤務回数や勤務時間数が、以前よりも増えた	16	5.4
以上のような変化はとくにない	92	30.9

図表2 所属の部別にみた、夏休み明け現在の1週間の勤務時間数

	1部 (昼間部)	2部 (夜間部)
合計 [単位：人・%]	244 100.0	119 100.0
5時間未満	16 6.6	7 5.9
5～10時間未満	46 18.9	17 14.3
10～15時間未満	59 24.2	17 14.3
15～20時間未満	74 30.3	34 28.6
20～25時間未満	34 13.9	24 20.2
25～30時間未満	11 4.5	8 6.7
30時間以上	4 1.6	10 8.4
無回答		2 1.7

アルバイトが有給休暇を使うことができるかどうかについても、「できる」は41.9%にとどまり、「できない」が21.2%、「わからない」が36.1%である。

回答者の約9割がシフト制の下で働いている。休業時における所得保障などシフト制労働者の保護・権利擁護が政策的な課題になっていることもふまえて、今年度の調査では、シフトに関する状況を詳細に尋ねた（シフトが組まれる周期、希望通りにシフトに入れるか、問題状況の有無、総合的な評価など）。図表4はその一部である。「シフトの決まるのが遅い」が3分の1強で選択されているほか、シフトが決まった後にシフトに入れないかどうかの照会、急にシフトに入れられる、そして、割合は小さいが、決まっていたシフトの取り消しといった問題が確認された。

(3) 経済的な状況：学費負担・学費の原資について、複数回答可で尋ねた後、そのうち主な一つを選択してもらったのが図表5である。前者でも後者でも、「親の収入」が最多であるが、2部（夜間部）では、それぞれ61.3%、45.1%の割合にとどまり、1部（昼間部）の89.6%、75.4%と大きな差がみられる。後者（主な一つ）で「貸与型奨学金」を選択しているのが、1部では13.5%、2部で19.0%みられるほか、2部では「自分自身のアルバイト収入」も19.7%に選択されている。

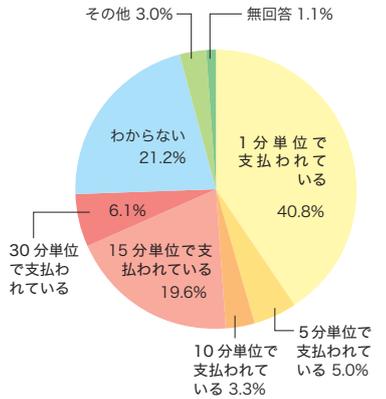
実際、アルバイトをする理由（図表6）で2部では、「学費・生活費等を稼ぐため」、「どちらかといえば学費・生活費等を稼ぐため」が合計で5割を超えている。「どちらも半々」まで含めると全体の4分の3を占める。アルバイトをできなくなれば、修学の継続が困難になることが予想される。

コロナ下での、自分を含む家族内での仕事や収入が減った経験（複数回答可、図表7）では、「家族では仕事や収入が減った者はいない」が62.4%であるが、「親など学費負担者の仕事や収入が減った」が19.0%のほか、「あなた自身（自分自身）のアルバイト収入が減った」が12.1%である。

より精度の高い調査・研究活動を行い、必要な取り組みや政策を関係者に提起していきたい。今年度の『白書』は、次のURLにアクセスし「学生アルバイト」のカテゴリを選択してご覧ください。

→ <https://roudou-navi.org/> からダウンロード可

図表3 賃金（時間外労働、残業）の支払い単位は何分か 全体=363人



今年度の学生アルバイト白書は連載で配信。

図表5 所属の部別にみた学費負担・学費の原資【複数回答可】、そのうち主な一つ

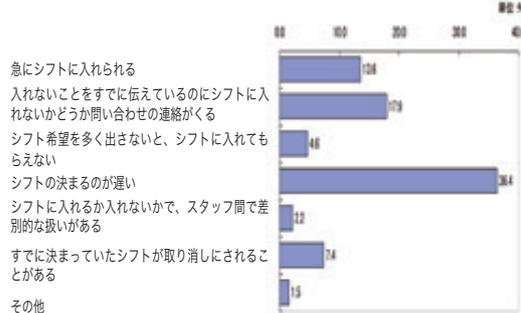
	1部	2部
合計 [単位：人・%]	289 100.0	142 100.0
親の収入	259 89.6	87 61.3
高等教育の修学支援新制度	46 15.9	36 25.4
その他の給付型奨学金	22 7.6	13 9.2
貸与型奨学金	95 32.9	57 40.1
自分自身のアルバイト収入	47 16.3	58 40.8
その他	6 2.1	5 3.5
合計 [単位：人・%]	289 100.0	142 100.0
親の収入	218 75.4	64 45.1
高等教育の修学支援新制度	22 7.6	18 12.7
その他の給付型奨学金	2 0.7	2 1.4
貸与型奨学金	39 13.5	27 19.0
自分自身のアルバイト収入	3 1.0	28 19.7
その他	4 1.4	3 2.1
無回答	1 0.3	

注1：高等教育の修学支援新制度には、「授業料の減免、給付型奨学金」と付記。
注2：貸与型奨学金には、「返済を必要とする奨学金」と付記。

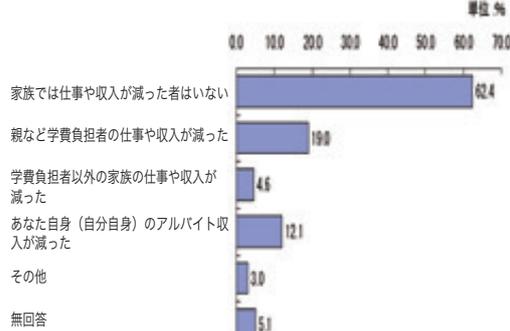
図表6 所属の部別にみたアルバイトをする理由

	1部	2部
合計 [単位：人・%]	244 100.0	119 100.0
遊び・趣味等にお金を稼ぐため	79 32.4	10 8.4
どちらかといえば遊び・趣味等にお金を稼ぐため	78 32.0	19 16.0
どちらかといえば学費・生活費等を稼ぐため	20 8.2	19 16.0
学費・生活費等を稼ぐため	23 9.4	43 36.1
どちらも半々	44 18.0	28 23.5

図表4 シフトに関する問題状況の有無【複数回答可】



図表7 コロナ下での、自分を含む家族内での仕事や収入が減った経験【複数回答可】



写真③④沖繩国際大学渡久地ゼミとのオンライン報告会（7月27日）と作業風景。⑤現地・沖繩国際大学にて。⑥労働経済論の授業で調査結果の中間報告（10月28日）。



1部・2部 佐藤信ゼミI

参加学生数 12名



佐藤 信
地域経済学科
教授



コープさっぽろエコステーション前にて

コープさっぽろ独自の事業活動を学ぶ

研修地：江別市

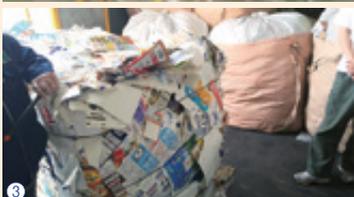
●研修目的

コープさっぽろは北海道の物流拠点である江別市に様々な施設を設置している。また資源回収・再利用のための学習施設も同地に存在する。ゼミではこうした施設および近くの野幌店の視察を通してコープさっぽろのSDGsの目標達成に向けた様々な取り組みを学ぶことにした。

研修先・日程

9月2日 北海道ロジサービス (江別市)
コープさっぽろエコセンター・エコステーション (江別市)
コープさっぽろ野幌店 (江別市)

写真①ロジサービスで基本事項の説明を受ける。②北海道ロジサービス内の広い倉庫。③エコセンターには全道から紙パック等が回収される。④組合員から回収した調理油。⑤コープさっぽろ野幌店。



●総括

コープさっぽろは北海道を活動エリアとした生活協同組合である。宅配トドックをはじめ、移動販売車や配食サービスなど様々な業態を展開する道内屈指の小売業でもある。さらに2015年に国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の実現に向けたフロントランナーともいえる存在となっている。研修では、まずコープさっぽろの物流施設である北海道ロジサービスを訪問した。この施設では自動運転によって作業効率を上げることを可能とした機械設備が稼働している。

次に、組合員から出される資源(牛乳紙パック、古新聞、廃油、服・靴など)の回収、リサイクルに繋げる事業を行うエコセンター、そして併設する教育施設の視察を行った。最後に、コープさっぽろ野幌店を訪問した。ここでは、とくにバックヤードにある、生ゴミ処理機の説明を受けた。この機械は店舗内の生ゴミを水と二酸化炭素に分解することで生ゴミ廃棄量を大幅に削減することに成功している。

今年の地域研修も、コロナ禍で予定する視察先が制約されていた。その中で、視察の対応ならびに日程調整して下さった関係の方々に感謝いたします。



ロジサービス内2階

学生研修記

SDGsを強く意識した取り組み

私たちは、江別市にある北海道ロジセンター、コープさっぽろエコセンター、そしてコープさっぽろ野幌店に訪れました。ロジセンターは、生活協同組合コープさっぽろに関する物流を担う関連会社として設立されました。自動でピッキングするシステムである「オートストア」など、あらゆる場所でロボットが稼働しているのを見て、とても驚きました。そして作業者の負担を減らすことに力を入れており、SDGsの目標として掲げられている「働きがいも経済成長も」を意識した環境づくりが行われている事が分かり、さらにここでの作業が、宅配システム「トドック」などを通じて同じくSDGsにある「住み続けられるまちづくりを」に繋がっているのだと感ずることが出来ました。

今回見学させていただいた全ての場所でSDGsを強く意識した取り組みを行っていることが実感でき、とても有意義な地域研修でした。

SGDsを感じられた地域研修

私たちは今回、江別市にある北海道ロジサービスとコープさっぽろエコセンター、及びコープさっぽろ野幌店を視察しました。ロジサービスはコープさっぽろに関する物流を担っている施設です。北海道初の最新型高密度自動倉庫「オートストア」を導入しており、ロボットが商品を自動でピッキングしてくれます。これにより、省スペース化・省力化を可能にしました。また、エコセンターは全道から集められる資源を回収し、リサイクルできるように加工する施設です。ここには、エコステーション・あすもり資料室などの環境への取り組みを深く理解できる施設が併設されていたり、見学ツアーを行っていたりと、コープさっぽろによる環境問題へのたくさんの取り組みがよく伝わってきました。そしてコープさっぽろ野幌店では、女性の店長さんに店舗を案内していただき、実際に現場を見ることで学べる機会が多くありました。

どの施設も、見る角度は違いますが共通して「SDGs」を意識した取り組みをしているのが印象深かったです。一日だけの短い地域研修でしたが、SDGsに関する多くのことを学び、体感できたいい研修でした。



畠山 彩花
地域経済学科 2年
札幌新川高校出身



安田 莉子
地域経済学科 2年
札幌平岡高校出身

1部 佐藤信ゼミⅡ

参加学生数9名



佐藤 信
地域経済学科
教授



ゼミ室にて

「海クリ」参加と学内ペットボトルリサイクルの現状

研修地：札幌市

●研修目的

コープさっぽろは2021年7月から「マイボトルエコアクション」を開始、海洋プラスチック問題の解決に向けた様々な活動を行っている。ゼミでは同生協の活動に参加しその意義を確認するとともに、学内ペットボトルリサイクルの状況を調べ、課題を明らかにすることとした。

研修先・日程

6月18日	海のクリーンアップ大作戦への参加
11月18日	北海学園大学において担当者へのインタビュー

写真①石狩東海岸。レジ袋などが散らばっている。
②大型ごみも放置されている。③他のゼミも集まって記念撮影。④学内のゴミ箱の一つ。学校法人が管理。
⑤大学裏にあるリサイクルステーション。⑥大学は事業所系ごみなのでカン・ペットボトルは特に分別していない。⑦大学関係者への質疑応答(杉山事務部長と山村課長) ⑧とりまとめを行っている学生たち。



●総括

コープさっぽろと本学が連携協定を結んだのが2019年。新型コロナウイルス感染症の影響で連携の取り組みは遅々として進まなかったが、本年度は、「海クリ」への参加が可能となった。正式名称「海のクリーンアップ大作戦」は、21年秋から始まるコープさっぽろ主催の海岸の清掃活動である。そうした実践を通して、海洋ゴミ問題やプラスチック削減の意義を学ぶといった目的があり、第2回目の22年6月は全道で8000人以上が参加した。ゼミⅡでは9名が参加するとともに、後日、生協担当者へのインタビューも行った。

秋からは、大学内におけるペットボトルの回収ルートに注目、その実態を調べるとともに、問題点も確認した。ペットボトルを異物混入したまま捨てるなど課題も明らかとなった。今後、ペットボトルの学内回収の仕方の見直し、回収率向上のための意識醸成などが必要と考えられた。SDGsという、取っ掛かりが予想以上に難しいテーマではあったが、ペットボトル回収を通してゼミでの目標が見えてきたようであった。今年度は学内の新たな回収ボックス設置までは行かなかったが、今後につながる成果が得られたと思う。

今回の研修に際して、協力をしていただいたコープさっぽろおよび大学関係者に深く感謝するものです。ありがとうございました。

学生研修記



中村 文哉
地域経済学科3年
札幌平岸高校出身



松川 智哉
地域経済学科3年
市立函館高校出身

学内視察を通して

われわれ佐藤ゼミではSDGsの「12つくる責任つかう責任」、「14海の豊かさを守ろう」という項目を踏まえ、学内ペットボトルの回収をコープさっぽろの回収ルートに乗せることを目標にした活動を行いました。実際に校内を回りペットボトルの回収場所を確認し、回収ルートを作成したり、学内担当事務職員の方にインタビューを行い、現在のゴミ回収の実態などを把握したりしました。そして、この調査によってわかった北海学園大学内のペットボトル回収の現状や課題をゼミ内でまとめ、ペットボトル回収の課題の解決や回収量を増やすための新たな提案を作成しました。この結果、遅くとも来年度からの本格的なペットボトル回収のためのキャンペーンや取り組みをスムーズに行うことが可能となり、コープさっぽろとの提携という最終目標に一歩近づくことができると期待しています。

コープさっぽろのごみに関する取り組み

私たち佐藤ゼミは「海のクリーンアップ大作戦」というコープさっぽろ主催のボランティア活動に参加し、海のゴミの状況を調べ、その現状からゴミを減らすための解決策を話し合いました。6月に行われた海のクリーンアップ大作戦では、8000人にも及ぶボランティア団体や、小中学校、企業、大学生でにぎわっていました。

年間800万トンに上るプラスチックゴミの海洋流出は、世界規模の環境問題となっています。そこで、コープさっぽろは、2021年7月にマイボトルエコアクションの取り組みを開始し、海洋プラスチック問題の解決に向けて様々な取り組みを始めました。海岸のゴミはプラスチック類が多く、おそらくキャンプ等で出た食品の袋ゴミなどが多く見受けられました。マイボトルエコアクションで、マイボトルの輪を広げ、ペットボトルを適切にリサイクルし、河川や海岸等の清掃活動を行うことがコープさっぽろの取り組みの目的となる事がわかりました。

1部・2部 中園桐代ゼミ I・II

参加学生数 1部4名・2部2名



中園 桐代
地域経済学科
教授



右から3人目が男女共同参画担当主幹・清野浩子さん

岩見沢市役所における女性管理職登用の実態と課題

研修地：岩見沢市

● 研修目的

『2030』という「社会のあらゆる分野において、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度」という目標は、2020年に「20年代の可能な限り早期」に「30%程度」と先送りされた。岩見沢市役所を事例として、女性職員の管理職登用がどのように進められているのか、岩見沢市総務部人事課課長と市民環境部市民連携室男女共同参画担当主幹からレクチャーを受け、実態と課題を明らかにする。

研修先・日程

9月26日 岩見沢市役所庁舎見学、総務課人事レクチャー、市民環境部市民連携室男女共同参画室レクチャー
安田侃彫刻美術館 アルテピアッツァ美瑛見学

写真①市役所庁舎屋上。②庁舎入り口の安田侃彫刻心構。③市役所での研修。④アルテピアッツァ美瑛にて。



①



②



③



④

● 総括

人口減少が進む地方では、女性を含めた多様なニーズに自治体が応えるためにも、女性職員を責任ある立場で自治体の政策立案に関わる必要がある。しかし、内閣府のデータで全国の自治体を見ても、ごく一部を除けば2030の実現は程遠い。

岩見沢市役所では管理職手前の係長職の女性登用は進んでいるものの、管理職である課長、部長職の人数は目標値に届いていない。

昇進のための試験や上司の推薦は行っていない。在職年数を超えると次のポストへ昇進させる。男女の差異はなく横並びであるが、母数としての女性職員が少ないのが、女性管理職が増えない理由である。もし、本気で管理職割合3割を目指すのであれば、管理職となる女性を外部から経験者採用するしかない。

また、新卒採用者の女性を増やす必要もあるが、近年、岩見沢市役所の採用者数は低迷しており、業務を遂行するために非正規雇用やアウトソーシングで女性を雇用している。彼女らは、管理職登用の対象ではないので、女性非正規雇用者の正規雇用への転換も必要である。



岩見沢市議会会議場：帆立の殻を利用した白い壁と道産木材を使用

学生研修記

岩見沢市役所で学んだこと

私たち中園ゼミは、岩見沢市役所を訪れ、女性管理職登用の実態と課題について学びました。担当の中園教授が岩見沢市の男女共同参画推進プラン推進委員を務めており、そのつながりから、こちらで研修を行わせていただきました。



桑原 健正
地域経済学科2年
浜頓別高校出身

私たちはまず、岩見沢市市役所の女性職員の状況についてお話を伺いました。女性職員の割合は全体の2割強であると話されていました。その内、管理職は一割に満たないことがわかりました。また、今後の女性管理職の目標割合についても教えていただきました。しかし、目標には届いておらず、事後研修で学んだ「2030」という目標にも届いていないことがわかりました。次に岩見沢市役所の女性支援を目的とした活動について教えていただきました。例えば、生理用品の無償配布や企業、学校への出前授業があります。

地域研修を通して岩見沢市の女性活躍に向けた活動について学んだのと同時に、それに向けた課題も見えてきました。女性管理職を増やすにはどうすればいいのか、私たちは係長職を増やすことがそれにつながるのではないかと考えました。

岩見沢市役所の女性管理職登用の課題



齊藤 優奈
地域経済学科3年
帯広三条高校出身

わたしたちは、政府で「2030」という女性の管理職割合を増加させるための目標が掲げられているにも関わらず、女性の管理職登用が進まない現状を課題に据えて、岩見沢市の市役所に研修に行きました。

職員課の方のお話から、岩見沢市役所では、女性の意見が市政に良い影響を与えているものの、女性の管理職登用を積極的に進めているとは言い難い状況がうかがえました。岩見沢市役所では女性の職員数が全体の1/4程度にとどまっています。そのため、そもそも管理職になれる女性の人材が少ないのです。また、採用した職員は一律「係員」からはじまり、管理職になるまでには10年ほどかかります。今の昇格方法のままでは、女性の採用を増やしたとしても、すぐに管理職割合の増加には影響しないのです。

研修で明らかになったこれらのことから、今後政府目標「2030」を達成するためには、岩見沢市は採用と昇格の方法を大きく変える必要があると考えました。女性の社会参画には未だ大きな壁があると改めて考える機会になった研修でした。

1部

西村宣彦ゼミ I・II 浦幌班

参加学生数 14名



西村 宣彦
地域経済学科
教授



浦幌町昆布刈石海岸

浦幌町における高齢者の買い物機会創出 実証実験プロジェクト

研修地：浦幌町

●研修目的

商店のない地域で暮らす移動手段のない高齢者が、身近な場所で買い物できる機会を創出することで、多世代が心豊かに暮らせる地域づくりを進めることを目指して、昨年度に引き続き HBC、十勝うらほろ楽舎と協働し、浦幌町吉野地区で移動販売の実証実験に取り組んだ。

研修先・日程

第1回訪問

- 7月14日 「十勝うらほろ楽舎」についてのレクチャー（宮寺氏）。吉野公民館「1・2・サロン」の皆様と座談会（浦幌町社会福祉協議会）。
- 7月15日 協力商店（スーパー中山、ファッションRISE）と打ち合わせ。まちづくり関係者へのヒアリング（①NPOうらほろスタイルサポート・本間氏、②（株）チオカイ・森代表、③北村林業（株）・北村代表、④（株）リベリエンス・小松代表）。
- 7月16日 十勝うらほろ楽舎・小倉氏のガイドで町内見学（昆布刈石海岸、厚内漁港、TOKOMURO Lab（「うららパーク」含む）、浦幌炭鉱跡、浦幌高校）。

第2回訪問

- 8月29日 チラシ素材写真撮影&打ち合わせ。
- 8月30日 チラシ素材写真撮影、アンケート設計に關する打ち合わせ。

第3回訪問

- 9月20日 会場下見、POP作成、販売商品の車載。
- 9月21日 移動販売の開催（設営、販売、アンケート調査、撤収作業）。

写真①「十勝うらほろ楽舎」についてレクチャー。②南浦幌地区住民の方々と座談会。③浦幌発の空間型VR「デジタル森林浴」を体験。④チラシ素材の撮影。⑤値札ポップの作成。⑥買い物した高齢者にアンケート調査。



●総括

昨年度は地元商店の商品の紹介動画を、HBCのサポートを受けて制作し、自宅テレビで動画を視聴して買い物をしてもらう方式で取り組んだが、ネットTVの操作性や商品を手に取って購入したい高齢者らの意向を踏まえて、今年度は移動販売方式での実証実験に取り組んだ。最初の訪問では事業を実施する地区の高齢者の集い「1・2・サロン」の参加者と目線合わせや意見交換を行うと同時に、「うらほろスタイル教育」をはじめ同町の特徴あるまちづくりの取り組みや、それらに惹かれて同町に移住や起業した方々から話を伺い、浦幌町への理解を深めた。2度目の訪問では移動販売の開催を告知するチラシの素材写真の撮影など、実施に向けた準備を行った。3度目の訪問が移動販売の本番で、「1・2・サロン」の日に開催したことで、多くの方々に買い物していただけた。今回の試みを通じて、①商品ニーズ（パン・惣菜の充実等）、②移動手段のない高齢者への対応（送迎 or きめ細かな移動販売）、③（人的・資金的に）持続可能な運営体制と仕組みづくりといった課題が見えてきた。学生は地域づくりの実践に参画することを通じて、深い学びと経験を得ることができた。浦幌町とHBCの関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。



QRコードから学生が制作した動画報告書の視聴ができます。

学生研修記

佐々木 麻友
地域経済学科 2年
旭川永嶺高校出身



人とのつながりと温かさを感じた浦幌研修

商店のない地域で暮らす高齢者の買い物機会創出を目指して、移動販売の実証実験に取り組みました。最初の訪問では地域の方々と座談会を行って率直な意見を聴き、次の訪問ではイベント内容や販売する商品を知らせる折り込みチラシを作成しました。文字の大きさや色、レイアウトなど、高齢者にも見やすいように工夫する必要があり、チラシ作りの難しさを実感しました。移動販売当日は多くの方が足を運んで下さり、会話しながら楽しそうに買い物をされている様子が印象に残りました。アンケートでは、今後も利用したいという前向きな回答がほとんどで、高齢者が心豊かに暮らせるまちづくりに向けて、一歩前に踏み出すことに貢献できたのではないかと思います。3回の訪問を通して、町を大切に思う気持ちが浦幌町をよりよくしようと行動を起こす原動力になっていると学びました。移動販売の継続実施に向けて新たな課題が見えた点も含めて、他では得られない貴重な経験になりました。

佐藤 芽衣
地域経済学科 3年
札幌啓成高校出身



まちの未来を考えて挑戦する浦幌町

昨年に引き続いてプロジェクトに参加し、今年は町民に寄り添った活動ができたと感じています。昨年は、買い物が困難な高齢者に視聴してもらうショッピング動画を作成しましたが、「機械の操作方法が難しい」「直接見て買いたい」などの声が挙がり、デジタルだけで解決することの難しさを感じました。それを踏まえて、今年は移動販売とチラシ配布というアナログな方法に、ZOOMでの店主との会話を組み合わせて実施しました。当初は移動販売に対して「今後に生かせるのか」と否定的な声もありましたが、実際に実施した後の感想として、「これならできそうかもね」という声や「感動して泣きそうになっていた方もいた」と伺い、とても嬉しく思ったのと同時に、一度だけでなく継続的に行う仕組みづくりが大切だと考えました。2年間の研修を通じて、浦幌町は町の未来を考えて挑戦している素敵な町だと感じました。このプロジェクトが今後よりよい形になることを願っています。

2部

西村宣彦ゼミ I・II

濱田武士ゼミ I・II 合同研修

参加学生数 15名 [西村ゼミ8名、濱田ゼミ7名]



西村 宣彦
地域経済学科
教授



濱田 武士
地域経済学科
教授

鉦路町の DX 化の課題—キャッシュレス決済の導入状況

研修地：鉦路町

●研修目的

各自治体は地域の DX 対応を急いでいる。しかしキャッシュレス決済の普及状況などについては地元データが無い。そこで本地域研修では、道東の最大商業施設集積地である鉦路町セチリ太地区においてキャッシュレス決済の導入調査を行い、DX 化の課題を考察することにした。

研修先・日程

- 9月29日 鉦路町役場で研修
尻羽岬視察
- 9月30日 鉦路町セチリ太地区にてキャッシュレス導入状況調査
- 10月1日 細岡ビクターズラウンジ・細岡展望台見学
鉦路フィッシャーマンズ・ワーフMOO見学

写真①鉦路町役場で町の概要を学ぶ。②細岡ビクターズラウンジ。③尻羽岬で集合写真。④別保公園の直売所を見学。⑤調査の予行演習⑥⑦セチリ太地区の店舗に訪問。



●総括

調査は役場に事前連絡をしていただいた209店舗を対象とした。ArcGISとSuvvey123という地理情報システムのアプリケーションを用い、訪問調査で収集したデータを位置情報と紐付けて表示・分析できるようにした。

調査結果はキャッシュレス決済に対応する事業所は164、全体の78.4%で約8割だった。中でもクレジットカード決済に対応する事業所が多く、次いでスマホ決済（QRコード決済）、電子マネー決済が多かった。スマホ決済（QRコード決済）では、PayPayが一番普及しており、次いでAEONペイ、auペイ、LINEペイ、d払い、楽天ペイの順に多かった。電子マネー決済では、iDとQUICPayが125件、交通系（Suica等）が123件のほか、WAONやnanacoなどが対応していた。これらの結果を踏まえてゼミ生たちは、鉦路町に以下の3つの提案を考えた。①鉦路町のキャッシュレス決済マップを作成して見える化し、利用促進の取り組みを行う。②導入していない店舗に対して町が導入の助成をして、同時にキャッシュレス決済ウォークラリーを実施する。③デジタル地域通貨「まちのコイン」のシステムを町で運営し、鉦路町限定のキャッシュレス決済を導入する。

学生研修記

小山 翔大
地域経済学科 2年
英藍高校出身



キャッシュレス決済のこれからの見解

今回私たち西村ゼミ、濱田ゼミの合同ゼミは鉦路町を訪れ、鉦路町のDX推進に活用してもらうために鉦路町役場から指定された209のお店を1軒1軒回り、ArcGISというアプリケーションを活用し、各店舗のキャッシュレス決済の導入状況について調査してきました。調査の結果としては、当初私が想像していた以上にキャッシュレス決済の普及が進んでいると感じ、地方でも現金を持ち歩かなくて良いという利便性が向上していると感じました。それでもなお、都市部ほどの普及には至っていないというのが現状であり、キャッシュレス決済の規模を拡大することで利便性の向上や業務効率化の手間の削減ができる点、また外国人観光客向けのUnionPayなどのクレジットカードをより普及させればインバウンド効果も期待でき、鉦路町の発展に繋がっていくと感じました。研修を通して、聞き込み調査をした際に、丁寧な受け答えをして頂き、町の人の親切さを身に染みて感じる事ができました。

畠山 駿一
地域経済学科 3年
市立函館高校出身



キャッシュレス決済の普及は日本経済成長の鍵?

私たちはこの鉦路町のキャッシュレス決済の導入状況調査を通して、地方におけるデジタル化の現状を知ることができました。日本は先進国で唯一デジタル化が遅れている国であり、30年間経済成長も止まっています。そんな中で一地方のキャッシュレス決済の状況を調べ、役場に情報提供ができたことは、今後の政策を行う上で第一歩を提供できたのではないかと感じています。しかし今回の調査は地域経済を活性化するという長期目標に対しての1プロセスでしかないため、次はこれらのデータを活用した新たな政策を打ち出し、どれだけ地域経済を良くすることができるかが重要になると考えています。ぜひ今後の取り組みに期待したいです。広い視野でいずれは全ての店で、個人の好きな決済方法が可能になれば、もっと経済が回り、経済発展を支える仕組みが完成するのではないのでしょうか。

最後に、とても楽しい研修になりました。皆さんありがとうございました。



細岡展望台にて



大野 純
地域経済学科 2年
下館第一高校出身

地域研修を通して

私たちの合同ゼミでは、キャッシュレス決済の導入状況調査をするために釧路町を訪れました。キャッシュレス決済の導入状況の確認に加え、キャッシュレス決済の導入が今後の地域経済の発展につながるかという調査も兼ねています。調査方法としては、釧路町役場から調査依頼のあった209の店舗を、一店舗ずつ訪問して聞き取りしました。また、ArcGISという地理情報を収集、整理、解析などができるシステムを用い、調査を進めていきました。調査結果として、対象地域のキャッシュレス決済対応店舗は164店舗であり、全体の78.4%ということが明らかになりました。また、個人経営店やチェーン店ではない飲食店は、現金決済が多いという傾向も分かりました。

聞き取り調査やシステムの利用など初めての経験で戸惑うこともありましたが、地域研修でしか学ぶことができないため、貴重な経験になりました。



安部 涼介
地域経済学科 3年
釧路明輝高校出身

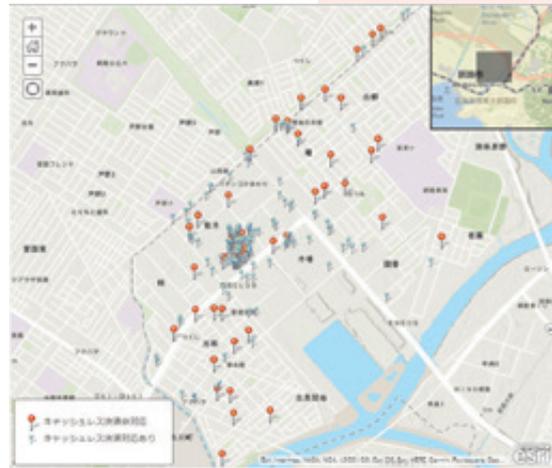
釧路町でのフィールドワークを終えて

昨年に引き続き今年も西村ゼミと合同で、本学と包括連携協定を結んでいる釧路町を訪問しました。

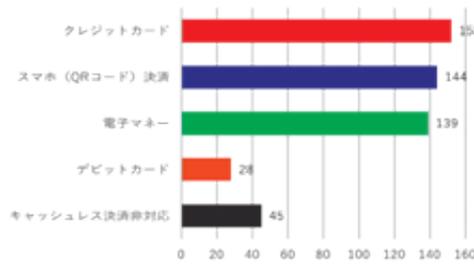
今回行ったキャッシュレス決済の導入状況調査の目玉は、ArcGISというアプリケーションを活用し、実際に調査したデータを地図上に落とし込んで、キャッシュレス決済の導入状況を見える化したマップが出来上がったことです。地域研修を通して、キャッシュレス決済の普及が地域内での購買の利便性を向上させることがわかりましたが、調査を進めると種類が統一されていないことや、対応している店と未対応の店では業種に偏りがあるなどの課題もありました。昨年の地域研修ほどのハードな作業はありませんでしたが、地図データを作るまでの、地域の事業所を一軒一軒回り調査結果をアプリに打ち込むという作業は、他で体験することはできない貴重な体験でした。この2年間のゼミ活動は、座学だけではなく足を動かした、より実践的な研修が多く有意義な時間となりました。



上：マップ上で見る業種内訳別分布図、
下：マップ上で見るキャッシュレス決済非対応店（現金のみ）分布図

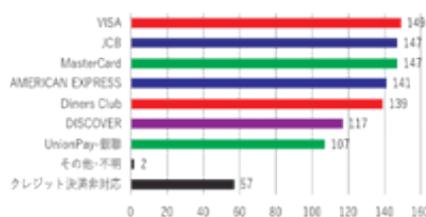


◆ キャッシュレス決済への対応状況



※デビットカードは、J-Debitとクレジットカードブランドのデビットカードの区別を十分確認しないまま聞き取りを行ったため、信頼性の低い参考数値。

◆ クレジット決済への対応状況



◆ スマホ（QRコード）決済への対応状況



◆ 電子マネー決済への対応状況



1部 西村宣彦ゼミ I・II 東川班

参加学生数 10名



西村 宣彦
地域経済学科
教授



大雪山最高峰・旭岳にてガイドの黒木さんと記念撮影

東川町の文化・自然を活かした魅力を高める まちづくり

研修地：東川町

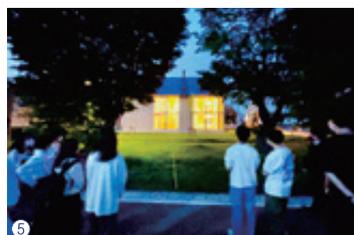
●研修目的

20年近く緩やかに人口が増え続けている全国的にも珍しい町・東川町のまちづくりの取り組みとその背後にある考え方、そして移住者らを惹きつけるまちの魅力を探るため、同町役場で町長及び課長職から講義を受けるとともに、町外からの移住者らにヒアリングを行った。

研修先・日程

- 9月26日 松岡市東川町長の講話
東川町役場レクチャー（高石東川スタイル課長、大角学校教育課長、藤井文化交流課長、吉原税務定住課長）
文化交流複合施設「せんとびゅあ」見学。
振り返りミーティング
- 9月27日 HAC・黒木さんのガイドで旭岳散策
町文化交流課・谷地氏ガイドで町内施設見学（三千櫻酒造、文化ギャラリー、東川小学校、グリーンヴィレッジ（車上）、KAGUの家）
「ヨシノリコーヒー」 嚮夫妻ヒアリング。
振り返りミーティング
- 9月28日 東川町立日本語学校見学 & 小山校長の講話
「ウッドワーク」 岡村社長ヒアリング、工場見学
「自由咖喱」 関夫妻ヒアリング

写真①松岡市東川町長の講話。②東川町役場ヒアリング。③安田侃作品を設置した東川小学校。④「ヨシノリコーヒー」ヒアリング。⑤サテライトオフィス群「KAGUの家」見学。⑥「ウッドワーク」ヒアリング&工場見学。



●総括

東川町が人口増加それ自体を目標とせず、住民福祉と「東川らしさ」を重視したまちづくりに地道に取り組んできたことが、地域の魅力や発信力の向上につながり、結果的に人口増・社会増につながってきたことは、大変教訓深い事実のように思われる。東川の魅力に移住者目線で見ると、行政の移住支援や、豊かな自然や景観のよさ、旭川市街や空港へのアクセスといった立地要因も大きい。定住という観点では子育て・教育施策の充実や、「適疎」を掲げて「東川らしさ」を守ろうという意識、そして「写真のまちづくり」に代表される文化交流事業の継続実施を通じて、ヨソ者に寛容な空気が醸成されてきたことも大きいのではないかと感じる。西村ゼミとしては2年ぶりの訪問だったが、岐阜・中津川から移転した「三千櫻酒造」や、隈研吾氏プロデュースのサテライトオフィス「KAGUの家」が新たに誕生していた。順風満帆に見えるが、松岡町長を先頭に町職員がアンテナを高く伸ばし、国の制度を徹底研究して行動・挑戦してきたこと、そして町民自身も町の魅力の一翼を担ってきたこと、この両者が噛み合っている町の魅力が少しずつ高まってきているのではないかと感じる。受け入れていただいた東川町の皆様に感謝申し上げたい。

学生研修記

片野 結
地域経済学科 2年
札幌光星高校出身



田中 佑奈
地域経済学科 3年
札幌東高校出身



独自の教育制度で子育てしたくなる町

東川町の町長さん、各課の課長さん、移住者の方にお話を伺いました。話を伺いする中で、東川町は役場で働く職員の方のアイデアを大切にしていること、国の制度や補助金、東川町にある資源を最大限に生かしてまちづくりをされているのを感じました。私はその中で特に、「小さいころから本物の芸術に触れる」という考え方に基づいて、東川小学校に安田侃さん作の大きな石が置かれていたことが印象に残っています。ほかにも「君の椅子」プロジェクトや新教科「globe」による国際教育など、子育て支援や教育事業が充実していて、一般的な自治体との違いを感じました。さらに東川町のきれいな風景を活かした写真のまちづくりや、全国初の公立日本語学校設立など、国内外との文化交流事業も大変盛んです。東川町は人口増加を目指すまちづくりというよりも、住民のためのまちづくりに真摯に取り組む、それで魅力が高まって移住者が増えているという印象を受けました。

人を惹きつける適疎な町

東川町は豊かな自然や「写真の町」文化を生かしたまちづくり、特色ある子育て支援やひがしかわ株主制度等、さまざまなことに取り組んでいます。これらは、チャレンジ精神を持った町職員が町民のために取り組んできたものであり、その結果、多くの人々を惹きつける「東川らしさ」を生み出していました。また東川町は、緩やかに人口増加が続いている町です。しかし、東川町は人口増加を目標とはせず、住民の暮らしやすさのため、8,000人という人口規模を維持する「適疎な町」を目指していました。実際に移住者の方々は、「東川町の人口が増えすぎないでほしい」とおっしゃっていました。そのことから、今の人口の規模感が、東川町での暮らしやすさや居心地の良さにつながっており、東川町の魅力の1つになっているのだと感じました。研修を通して、人々はこれらの多くの東川町の魅力から、人それぞれの東川町の良さに惹かれ、移住・定住しているのだと実感しました。

1部 濱田武士ゼミ I・II 鹿追研修

参加学生数24名



濱田 武士
地域経済学科
教授



然別湖畔

脱炭素の町 鹿追町のまちづくり

研修地：鹿追町

●研修目的

鹿追町は十勝管内にあり帯広市の北側に位置する農業のまちである。この町は2022年4月26日に環境省により「脱炭素先行地域」に選定された。本地域研修では、鹿追町に訪問して、脱炭素に向けた取組内容と、産業やまちづくりとの関係を学ぶことにした。

研修先・日程

- 9月1日 鹿追町役場：鹿追町のまちづくりについて
自営線ネットワークの見学
環境保全センター中鹿追の施設見学
- 9月2日 鹿追町役場：鹿追町の農業について
神田日勝美術館見学
福原記念美術館見学
とかち鹿追ジオパーク
- 9月3日 然別ネイチャーセンター

写真①鹿追町役場内での研修。②バイオガスのプラントの研修。③神田日勝美術館での研修。④福原記念美術館での研修。⑤然別湖畔の足湯温泉での休養(菅原君・奥田君)。⑥とかち鹿追ジオパーク内の研修。⑦然別ネイチャーセンターでのアクティビティの体験(カヌー体験)。



●総括

鹿追町は、大規模酪農家や畑作農家を有する農業を経済基盤とする町である一方で、山間部は大雪山国立公園がある自然溢れる町で、然別湖とその周辺の自然を資源にした観光にも力を入れている。しかも、人口5000人程度の規模でありながら、農民画家であった神田日勝の作品を展示する町立の神田日勝美術館と、神田日勝の画家活動を支え地元商人だった福原治平が私財を投入して設立した福原記念美術館という二つの美術館を有している。この町の脱炭素の取組は酪農から生じる排泄物の悪臭対策として始めたバイオプラントの設置を嚆矢とする。バイオプラントからはバイオガスを供給し、それを使った発電により電力供給も可能にした。またその余剰熱で「チョウザメ飼育」「サツマイモ栽培」「マンゴー栽培」にも挑戦している。さらには、バイオガスから水素を製造し、販売する「しかおい水素ファーム」も設置している。その他に、防災対策として太陽光発電による電力の地産地消を実施している。以上のように鹿追町は、観光振興や文化振興に加えて脱炭素を進めてきているが、その経緯には地域農業があり、農業のまちを基本として文化・環境を発展させてきたと言える。

学生研修記

平山 優太
地域経済学科 2年
滝川西高校出身



挑戦を続けるまち

鹿追町はゼロカーボンシティ挑戦を目指し、2022年4月には国の定める脱炭素先行地域に指定され、バイオガスプラントを利用した電力の発電を行っています。その背景には、鹿追町の基幹産業である酪農によって発生した悪臭問題があり、観光業に悪影響を与えていました。その問題の解決や農業と観光業の両立を目指して、家畜糞尿の適正処理を可能とするバイオガスプラントを建設しました。この建設により、地域経済においては約1000万円もの漏れ穴を防ぐことができ、さらには新産業創出にも繋がっていました。この事業以外にも農業を発展させるためのコントラクター導入も鹿追町が発祥の地であることや、女性農業研修のピュアモルト事業、さらには教育においても独自カリキュラムの導入や山村留学などを行っていました。今回の研修を通して、鹿追町は新たなことに挑戦し続けていることがわかりました。このようなまちは魅力的であり、人が集まってくる地域になるのではないかと感じました。

奥田 大稀
地域経済学科 3年
北高高校出身



新たな挑戦を続ける町 鹿追町

私たちは鹿追町の脱炭素のまちづくりについて学んできました。鹿追町は基幹産業である農業を土台に発展してきた町であり、ゼロカーボンシティの宣言と脱炭素先行地域の選定に関しても鹿追町の農業が深く関係しています。鹿追町の農業は酪農を軸として、スマート農業技術や鹿追町発祥であるコントラクターの導入によって農業生産額と生産効率を上げてきました。家畜糞尿による悪臭問題をバイオガスプラント建設により解決し、これが農業発展の促進にも繋がっていました。

現地では深く関わりのある町営の美術館を訪問したり、余剰熱利用事業施設でのチョウザメの飼育やマンゴー栽培の見学などを行いました。また、とかち鹿追ジオパークでのお話や然別湖ネイチャーセンターでの体験活動によって鹿追町の自然を肌で感じることができました。

この研修を通して、バイオガスプラントの理解が深まったとともに、世界に誇る十勝の農業の素晴らしさを体感することができました。

1部 濱田武士ゼミ I・II 当別研修

参加学生数24名



濱田 武士
地域経済学科
教授



ロイズ太美工場の近隣

ロイズタウン駅周辺環境の構想から 当別町の活性化へ

研修地：当別町

●研修目的

本地域研修では北海道石狩振興局における地域政策推進事業「いしかり・ライフ style 魅力発信・若者定着促進事業」に参画して、当別町太美地域において2022年3月12日に開業したロイズタウン駅の周辺環境のまちづくりを構想することにした。

研修先・日程

8月29日	農家へのヒアリング ロイズ太美直売所訪問 各駅で町民にアンケート調査
9月末	北海道医療大学の学生へのアンケート調査 (Google Formsによる調査)
10月24日	スウェーデンヒルズ交流センター 観光スポット各所を訪問 道の駅とうべつ

写真①ロイズタウン駅。②ロイズの工場と駅の送迎バス。③農家さんでヒアリング。④ロイズの工場。⑤街中アンケート。⑥ロイズの直売所。⑦スウェーデンヒルズでのヒアリング。



●総括

当別町は農業のまちである一方札幌市のベットタウン的要素もある。また北海道医療大学が立地しており一定の若年層が確保されている。しかし少子高齢化の歯止めになっていない。また当別町は観光やレジャー拠点の開発が進んでいないことから交流人口の拡大の余地を残している。そのような中、スイーツを製造販売するロイズの工場兼直売所が太美地区に立地し、それを切っ掛けにJR札幌線にロイズタウン駅が新規に開設した。札幌市からの従業員の通勤を円滑にするための開業ではあったが、それだけでは地域の活力再生は限定的である。そこで本地域研修では、地域活性化に必要な若者層の交流人口を増やすという視点から、地元農家や市民あるいは大学への聞き取り調査やアンケート調査を行い、さらに当別町内の観光スポットを視察・見学し、ロイズタウン駅を核にした地域振興案を構想した。調査などの結果から「景観を壊さず自然を生かしてほしい」「レジャー施設・飲食店が欲しい」という意見があることがわかった。これらの意見を踏まえて、地元環境と地元産業を念頭に置いた「ロイズの新商品案 (写真)」「レジャー施設 (写真)」「ロイズタウン駅前開発 (写真)」の構想案を描いた。

学生研修記



田村 武蔵
地域経済学科2年
留萌高校出身

地域住民が後押しできる開発を目指して

私達は、今年3月12日に学園都市線「ロイズタウン駅」が開業した当別町を2回訪問しました。農家の方々への聞き取り調査から「景観を崩さず自然を生かして開発を進め、交流人口を増やす」というテーマを設定し、これを実現するための3つの指針を提案することになりました。1つ目はロイズと当別町のコラボ新商品開発です。地元の食材を使うことで地産地消し、発信力のある若者を集客するために、インスタ映えする商品を考えました。2つ目はレジャー施設の開発です。これは町の若者である日本医療大学生への聞き取り調査から、遊ぶ場所などが少ないという意見を参考にしました。具体的には、グランピング施設やロイズ太美工場の工場を利用した展望台などを考えました。3つ目はロイズタウン周辺の整備です。ロイズのチョコを模した遊具のある公園や地元の作物を使った料理とロイズのスイーツなどを提供するマルシェの設置を考え提案しました。このように、住民の方々に納得してもらいつつ、交流人口を増やすための案を私たちは提案しました。



江戸 力矢
地域経済学科3年
札幌国際情報高校出身

当別町活性化に向けて

私たちはロイズタウン駅開発に伴う駅周辺の開発や当別町全体の活性化を目的として当別町へ訪問しました。ロイズタウン駅付近には駐車場があり、完成後は50台もの規模になる予想です。また、徒歩5分のところにロイズ太海工場直売所があるので、新鮮な野菜や美味しいパンなどを食べることができます。当別町自体としてもスウェーデンヒルズや道の駅などがあり、魅力が多くあります。その一方で、観光客の集客は難しいという課題や主に年少人口の低下などの課題があります。私たちはロイズタウン駅の開発が人口増加のカギになると考え、町の人々にヒアリングをすると、田園風景を崩さず、地域の活性化につなげてほしいという意見を町民が持っていたことが分かりました。

当別町に実際に訪れるまでは、開発を安易に考えていましたが、実際にヒアリングしてみると、町民の人々にも沢山の思いがあり開発は容易なものではないなと感じました。私たちはレジャー施設とマルシェを提案しましたが、それも実際に行ってみないと分からないのでこれからも話し合いが必要であると感じました。

1部 平野研ゼミⅠ

参加学生数 10名



平野 研

地域経済学科
教授



ハリストス正教会 (改修中) にて

白系ロシア人の足跡をめぐる

研修地：函館市

●研修目的

ロシア革命後に日本に移民してきた、白系ロシア人家族・ズヴェーレフ家の足跡をたどることで、日本の資本主義の変化、日本とロシアとの関係、それに伴う貿易港・函館の変遷について考えていく。異国情緒漂う函館の「異国」を身近に捉える。

研修先・日程

- 9月25日 函館市中央図書館、五稜郭公園散策
- 9月26日 函館市立博物館、旧ロシア領事館、ロシア極東連邦総合大学・倉田有佳教授、各施設探索（旧ギリズ領事館ほか）
- 9月27日 ハリストス正教会、在日ロシア人墓地

写真①函館市立図書館。②旧ロシア領事館。③ロシア極東連邦総合大学にて。④極東大での調査。⑤函館市内散策。⑥函館市立博物館。⑦在日ロシア人墓地。



●総括

日本開国時からロシアとの貿易で栄えてきた初期資本主義期の函館は、水産資源・産業を中心としており、ロシア人もそれに従事する人が多く、主に西部地区に暮らしていた。しかし、ロシア革命から逃れてきた白系ロシア人は、資本規模が大きくなって済む洋服生地などの小売業を生業とし、駅周辺や郊外に住む人が多かったということが分かった。居住エリアが異なるだけではなく、白系ロシア人は函館市民との交流も深く、ズベールフ家の3女オリガさんは、戦後まで函館の学校に通い続けている。北海道の白系ロシア人のコミュニティが設立されていたが、その中心は函館であった。ハリストス正教会を中心としたロシア正教というよりどころがあったことも大きかった。このような調査を進めていく上で、最も重要であったのは、市立博物館や図書館に蓄積されている写真などの歴史的資料が豊富にアーカイブされているということであった。それらは、歴史的資料としてだけでなく、街を散策するガイドブックやグッズのパッケージなどの観光資源としても活用されており、函館の「異国」情緒を演出するものとなっている。現在は白系ロシア人は函館に居住してはいないが、その足跡は函館の街のあちこちに刻まれていることを知り、現在とつながる街のを考察していくことが、街づくりには重要であると感じた。

学生研修記

函館から学ぶことができた白系ロシア人



池原 響生

地域経済学科 2年
伊達緑丘高校出身

私たちは、地域研修において函館を訪れ、白系ロシア人の生活やロシアと函館のつながりについて学びました。私たちは、1日目に函館市中央図書館を訪れ、ロシアと函館の関わりについて調べました。ロシア人は羅紗行商人が多く、当時は洋服の需要が高かったことが分かりました。2日目には、市立函館博物館とロシア極東大学函館高に伺いました。博物館では、函館で活躍した白系ロシア人について知ることができました。ロシア極東大学では、倉田教授にお話を伺って、白系ロシア人のコミュニティや教育について知ることができました。また、ゼミの授業で触れていた白系ロシア人一家のズヴェーレフ家についての話も伺うことができました。3日目には、ハリストス正教会にお話を伺うとともに、白系ロシア人墓地を訪れました。白系ロシア人は、ロシア革命によって日本に亡命してきた人々であり、自らコミュニティを創出し、職業・生活支援を行い、助け合っていたことが分かりました。



安藤 浩希

地域経済学科 2年
紋別高校出身

函館と白系ロシア人

私たちのゼミでは、白系ロシア人について深く掘り下げ、その中の1人であるオリガ・ズヴェーレフさんに焦点を当て、オリガさんが幼少期過ごした函館市に今回調査に行きました。

函館市は古くから国際貿易港として開港し、ロシアとのつながりが深いこともあって、ロシア領事館などの建物や日本で唯一のロシアの大学であるロシア極東連邦総合大学函館校があります。この大学で教員をしている倉田先生の話を中心に白系ロシア人について多くの情報を聞くことができました。また、同日訪れた函館市立博物館では、函館市の開港から交易の歴史について調べました。地域研修を通して函館市の街並みを見て、現在でも西部地区では特に洋服の街並みが残っていました。これは外国人との交易が盛んであったことを示しており、ズヴェーレフ家を筆頭に多くの白系ロシア人が函館に足跡を残したのだと思いました。

1部 平野研ゼミ I・II

参加学生数 11名



平野 研
地域経済学科
教授



ゼミ室にて

函館市における SDGs 取組みの調査 ～3つのセクター市民・行政・企業

研修地：函館市

●研修目的

SDGs という多様な社会的課題に対して、企業・行政・市民運動というステークホルダーがどのように取り組んでいるのか、ということ函館市においてグループごとに調査を行う。その取り組みの調査の中で、各ステークホルダーの関係性や地域の課題について考察していく。

研修先・日程

9月26日	フードバンク道南協議会、大鎌電機、函館萬屋書店、函館国際観光コンベンション協会
9月27日	函館市役所、函館エコロジークラブ、レインボー函館プロジェクト、斉藤建設
9月28日	函館YWCAカフェ「リ・ボン」、株式会社NABEYA、函館新聞社
オンライン	函館市地域交流まちづくりセンター、函館国際交流センター

写真①函館市役所。②大鎌電機。③SDGsカードゲーム体験。④函館エコロジークラブ。⑤オンラインインタビューX。⑥「虹を履いて歩こう」靴下。⑦斉藤建設



●総括

企業・行政・市民運動というステークホルダーごとにグループを編成し、調査準備を行った。グループごとに調査先を選出し、調査のアポイントを取っていったが、コロナ禍ということもあり、調査に至らなかったケースも多くあった。そんな中でも、オンラインでのインタビューを提案するなどの工夫で、充実した調査を行うことができた。

企業班では、SDGsに積極的取り組みを行う企業だけでなく、多様な企業の話聞くことができた。そこから企業におけるSDGs活動が拡大している過程にあり、企業によって対応が様々ではあるが、社会的な企業としては対応が必然的であると考察した。行政班では、市役所だけではなく、函館市の観光業に注目し、観光関連の第三セクターにも調査対象を広げた。さらにはそれらを記事として取り扱うことが多い、地方新聞へも調査を行った点は、行政と他のステークホルダーとのハブとなる組織の重要性を考察において指摘するに至った。市民運動班では、市・道からの業務委託や協力関係について注視しながら、イベントやプロジェクトについて調査を進めていった。

現地調査ではグループ単位での行動が多かったが、その後の考察においては、相互の関連性を軸として、地域としての課題や特徴について多角的な議論ができるようになった。

学生研修記

地域研修を終えて



橋本 快斗
地域経済学科2年
札幌月寒高校出身

今回平野ゼミIIでは「函館におけるSDGs」というテーマに基づき函館で三日間の地域研修を行い、行政班・市民団体班・企業班に分かれて函館でのSDGsの現状について話を伺ってきました。私は行政班に所属し、初日は函館市役所、二日目は函館国際観光コンベンション協会、三日目は函館新聞社の三ヶ所回ってきました。研修期間中は毎日反省会を行い平野先生とも話し合いを重ねた結果元々の予定には無かった函館新聞社に話を聞く必要性を認識し、三日目のアポを二日目に取るという大きな動きもありました。が快く引き受けてくださった函館新聞社さんには感謝しかありません。

函館のSDGsの課題としては行政・市民団体・企業の3セクター間の連携不足、この3セクターの中で比較すると行政のSDGs事業への非積極性の2つが挙げられるのではないのでしょうか。現在新聞が担っているSDGsの広報活動についても、行政が行うべきではないかと思いました。

函館市におけるSDGsへの取り組み



酒井 日和
地域経済学科3年
帯広三条高校出身

私たちは今回、行政班・企業班・市民団体班に分かれて函館市におけるSDGsの取り組みとその中での3つの組織の繋がりを明らかにするために研修を行った。私は今回行政班として函館市役所、函館国際観光コンベンション協会、函館新聞社に訪問させていただき、そこから行政が考えるSDGsの位置づけを知ることができた。函館市は主に人口流出の防止や夜景などの観光地としての魅力を最大限引き出そうと尽力しており、函館市が掲げる函館市総合計画の各項目を達成していく中で結果がSDGsにつながっているものを見出そうとしていた。SDGsの達成を最終目標としているわけではなかったが、今後行政組織からSDGsに取り組んでいる企業や市民団体への積極的な補助や、3つの組織の繋がりを増やしSDGsに対する共通認識を持つことによって、今よりもっとSDGsに取り組もうとするインセンティブが現れると思うし、函館市のSDGs活動にはたくさんの可能性を持っているということが分かった。



2部 平野研ゼミ I

参加学生数3名



平野 研
地域経済学科
教授



生協前試飲会

フェアトレード・SDGs ステークホルダーの 関わりの調査

研修地：札幌市

●研修目的

昨年度から引き続き、本学大学生協での販売再開を軸として、フェアトレード・SDGsにかかわるステークホルダーについてインタビュー調査を行う。関連する商品の試飲・物販に加え、本学での意識調査を行うことによって、本学における今後の取り組みの基盤としていく。

研修先・日程

- 6月29日 北海学園大学生協打合せ・インタビュー調査
- 9月2日 環境友好雑貨店「これからや」、フェアトレード雑貨&レストラン「みんなたる」、札幌市役所環境計画課（佐竹輝洋氏）
- 10月3～7日 フェアトレード商品販売・コーヒー試飲およびアンケート調査（於・北海学園大学生協前）

写真①学園生協打合せ。②札幌市環境計画課（佐竹氏）。③これからやインタビュー。④みんなたるインタビュー。⑤生協前グッズ販売X。⑥生協前パネル展示。⑦これからや前。⑧フェアトレードショップ見学。



●総括

本年は大学生協前でのフェアトレードコーヒー試飲と物販を無事に開催することができた。単に試飲・販売をすることが目的ではなく、取り組みを通じて大学生協、フェアトレードショップ、および札幌市に聞き取り調査を行っていった。

大学生協では、コロナ禍で学生が登校できなくなり売り上げが急激に減少し、従来のようなフェアトレード商品の仕入れが困難になったことから、イベントとして学生の認知を広げるとともに、学生が生協に足を運ぶきっかけとなることを期待された。フェアトレードショップでは、コロナ禍で途上国生産者が被っている問題を知ることができた。同時に、近年エシカル（倫理的な）消費に関心が高まっているため、フェアトレードの需要も伸びており、小規模なマルシェなどのイベントに参加することで来店者数減少を補っているということであった。札幌市からはフェアトレードに関するパネルを借り、展示を行った。さらに札幌市では、市内の高校生や大学生を対象とした「気象変動SDGsアクションLabo」という取り組みを行い、より具体的なSDGs活動を模索していることを知ることができた。

残念ながら大学生協での販売は終了となったが、今後も学内での物販や、具体的な取り組みの可能性を感じ、新たな国際貢献のあり方について考えていく、きっかけとなった。

学生研修記



大井川 雄飛
地域経済学科2年
北海道栄高校出身

フェアトレードを通じて考えたこと

今回の地域研修は2年生3人で初めてだったため何も分からないまま行いましたが4年生の先輩や平野先生の助けもあったおかげでなんとか発表会まで辿り付くことができました。実際企業や市役所に行ってみて色々学ぶことができ言葉使いはもちろん予定の取り方その場にあったコミュニケーションの取り方など初歩的なところから学ぶことが多かったです。また、今回行ったフェアトレード・SDGsのステークホルダーの関わりの調査では企業がとても広く活動をしているにも関わらず意外と言葉は知っているが内容は分からないというような人が多かったり信用のあった企業が意外とフェアトレードには消極的であったりや発見も多くありました。今回は反省点が多くあったため来年は反省を活かして取り組みたいと思います。



河原 拓夢
地域経済学科2年
富良野高校出身

フェアトレードに関わっているステークホルダーの調査

今回の平野ゼミではフェアトレードに注目し、フェアトレードに関わっているステークホルダーを調査しました。ゼミを通して行ったことは札幌市役所、市民団である「これからや」「みんなたる」、北開学園大学生協にフェアトレードに関するインタビューを行い、また「みんなたる」のフェアトレード商品を三日間にわたり大学生協前で委託販売し、そこで学生を対象にフェアトレードに関するアンケート調査を行いました。地域研修を通してわかったことはフェアトレード商品の値段が高く購入しづらいということが分かりました。フェアトレード商品が高いという問題を改善していくためには日本でフェアトレード商品の流通量を増やしていくことが重要で、日本では流通量が少なく輸送費に大きな負担が生じてしまうため日本のフェアトレード商品が高いままです。フェアトレード商品の流通量を増やすことで値段を下げられ、購入する機会が増えることが分かりました。



1部 藤田知也ゼミ I

参加学生数 11 名



藤田 知也
地域経済学科
講師



貸切利用した被爆電車で

戦争遺産が作った広島のダークツーリズム： 未来へ繋ぐ広島の歴史

研修地：広島県広島市・呉市・江田島市・竹原市

●研修目的

「ダークツーリズム」とは負の遺産を巡る観光のことを意味し、戦争や災害の遺構が観光資源となる。単なる負の遺産として終わらせるだけではなく、こうした観光資源の活用方法を知り、学ぶことで、ダークツーリズムがどのようにして地域活性化に寄与できるかを考える。

研修先・日程

9月7日	被爆電車 大和ミュージアム
9月8日	砲台山・海上自衛隊第一術科学校・てつのくじら館 大久野島(毒ガス資料館)

写真①貸切利用した被爆電車。②被爆電車車内。
③大和ミュージアムでの講演。④砲台跡。⑤江田島の海。⑥海上自衛隊第一術科学校。⑦大久野島毒ガス資料館。



●総括

1部藤田ゼミ I では「ダークツーリズム」をテーマとした地域研修を行い、広島県内のダークツーリズムに関する観光資源を訪問した。

広島電鉄では被爆電車が今もなお現役で運行しており、今回の地域研修では貸切利用を行った。昭和20年には当然見られなかったICカードの車載器が搭載されている等、現在の運行に支障がないように部分的にリニューアルされながらも広島の過去を今に伝えている。大和ミュージアムでは学芸員の方による太平洋戦争当時の呉や戦艦について、江田島市の海上自衛隊の第一術科学校では、特別に平日に見学を許可して頂いたということもあり、太平洋戦争に係る資料のみならず、自衛隊員が訓練をしている様子も目に焼き付けることができた。

ダークツーリズムは一般的な観光において得られる「楽しい」という感情は全く生まれない。その中でこうした観光資源を活用して地域活性化につなげるには、如何にして「通常の」観光資源と組み合わせるかがポイントとなるのが学べたのではないだろうか。

最後になりましたが、広島電鉄の担当者の方、呉市役所の花岡様、海上自衛隊第一術科学校の西村様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記



小笠原 実紅
地域経済学科 2 年
網走南ヶ丘高校出身

ダークツーリズム

私たち藤田ゼミの地域研修は、研修テーマを決める際に「ダークツーリズム」に興味を持ったことから始まりました。これは負の遺産観光とも呼ばれるもので、戦争や被災地等の暗い過去を持つ地を巡ることを指します。

私達は今回、それらの代表地である広島県へ行ってきました。原爆ドームや平和祈念資料館は勿論、街中から少し足を延ばした先にある呉市には、戦争に大きく関わった戦艦の記録が保存されており、戦後の時代を生きる私たちには想像もできない未知な資料が展示されていました。更に、船で渡る江田島には、戦時の砲台跡や、今も実際に海上自衛隊が訓練を行う第一術科学校が存在しています。しかし、私たちは実際に広島県へ行き、整備されていない地や人が全く来っていない地などを目の当たりにし、ダークツーリズムは観光として確立されていないように感じました。戦時の悲惨な記憶を私達以降の新しい世代に繋ぐためにも、これらの観光地の整備、そして知名度を上げていくことが課題として残ることを実感しました。



田中 椋
地域経済学科 2 年
大麻高校出身

戦争遺産が作った広島のパークツーリズム

私たちは今回の地域研修で、新しい観光形態の一つであるダークツーリズムについて学ぶため広島県を訪問した。ダークツーリズムとは簡単に言うと「負の遺産観光」のことを指す。我々が行った広島県には太平洋戦争や日露戦争の際の戦争遺跡が数多く残っており、戦争の恐ろしさ、そして絶対にしてはいけないものなのだということを強く感じる事ができた。特にずっと北海道に住んでいる自分にとって「戦争」を感じる機会はかなり少ないため、戦争に対しての歴史や知見、そして思いや考えを深めることができ、とても良い経験になったと思う。

今回の研修を通し、ダークツーリズム自体はとても魅力的ではあるものの、それ単体での集客・認知度の拡大は今のままでは難しいことが分かった。今後は負の遺産の認知度の拡大や魅力の発信、そしてダークツーリズムというコンテンツ自体をどのようにすれば広めていけるかをゼミを通して考えていきたいと思う。

1部

藤田知也ゼミⅡ

参加学生数 10名



藤田 知也
地域経済学科
講師



箱館ハイカラ号と

観光地函館における公共交通の現状と今後について

研修地：函館市

●研修目的

函館市は市内中心部の観光地を路面電車や路線バスが結んでいる一方、市の東部では観光と交通両面において市中心部と差があるように見える。そこで、函館エリアの観光地を公共交通の面から視察し、路面電車の担当者の方からお話を伺い、函館の公共交通の今後について検討する。

研修先・日程

9月11日	南茅部地区 函館山
9月12日	恵山・五稜郭・谷地頭 函館市企業局交通部

写真①函館の夜景。②講演会の様子。③立待岬。
④湯の川温泉。⑤谷地頭にて。



●総括

1部藤田ゼミⅡの地域研修では函館市の観光地と公共交通に焦点を当て、市内各地の観光地における公共交通をグループ毎に視察し、函館市電の職員の方に函館市電の現状と今後について講演していただいた。函館市では、20km/h未満で公道を走行可能な電動車を活用した小さな移動サービスを意味する「グリーンスローモビリティ」の実証実験が行われていた。研修期間には南茅部地区で実証実験中であったグリスロに乗車したグループもあり、新たな公共交通機関を体験することができただろう。函館市電の職員の方による講演では、函館市民にとって市電は「空気」のようなあって当たり前存在であるというお話が印象深く、市電が移動手段という交通機関の本来の役割のみならず函館のアイデンティティとしても機能しているものと考えられる。

講演後には「箱館ハイカラ号」を貸し切ったが、通常は走らない夜のハイカラ号という貴重な経験ができたとともに、このハイカラ号を写真に収める多くの人々を見て、まだまだ函館には多くの魅力があり、市電を通じた地域活性化が期待できると強く感じた。

最後に函館市企業局交通部の廣瀬様をはじめ、訪問先でお世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。



貸切利用した箱館ハイカラ号車内で

学生研修記

川上 黎
地域経済学科3年
北海高校出身



松尾 佳弥
地域経済学科3年
札幌手稲高校出身



函館における公共交通の現状と今後

今回の地域研修では、函館市内の観光地を結ぶ路面電車を軸に函館の公共交通を実際に視察し、今後どのような展望を遂げていくべきかを研究しました。函館市電で働く廣瀬さんにお話を伺った際にコロナ禍に入り、厳しい経営状況がある中で、利用者の割合は市民が7割、観光客が3割と市民の安全を守り、シンボルとして運行を続けてきているということを学びました。

函館市電は超低床車、車いす対応の部分低床電車といった利用者に対する配慮を考えた工夫がなされている車両も存在します。また、ハイカラ号というレトロな外観と内装をしている特殊車両も定期的に運行されています。実際にハイカラ号に乗った際に観光客やマニアの方が停車時に写真を撮られていて、多くの人から愛されているのを感じました。

地域研修を経て市電の魅力が分かったので今後はコロナが終息すれば観光客の利用も増えるため、市電が一つの観光資源となりうるのではないかと感じました。

函館市の観光と交通

今回の地域研修では、道内有数の観光都市であり、市内中心部に点在する観光地を路面電車がつぶという、全国的に珍しい観光と交通の形を持つ函館市の各観光地の現状を、公共交通の面から視察し、今後について検討しました。実際に各観光地に訪れてみると、それぞれの観光地が魅力的である一方で、交通において様々な問題点やそれに伴った改善案が出てきました。

また、2004年に函館市に編入された東部地区では、函館市電ではなく函館バスが公共交通を担っており、グリーンスローモビリティの実証実験など新たな試みも行われていました。しかし、そこにも問題点は存在しており、効率的で持続可能な交通形態を目指すため改善が必要でした。

さらに、函館市電の担当者の方からお話を伺う機会をいただき、函館市電は、全体の利用者の7割が市民、3割が観光客であり、函館市のシンボリック存在や、市民の安全を守る役割も担っているということを学びました。

2部 藤田知也ゼミ I・II

参加学生数5名



藤田 知也
地域経済学科
講師



上磯の海岸にて

公共交通から見る函館の現在・未来

研修地：函館市・北斗市

●研修目的

公共交通機関が発達している函館だが、人口は増加しておらず、地域の産業の1つである観光業についても、新型コロナウイルスの影響によりは大打撃を受けた。今後函館をどのようにして発展させていくかを、公共交通の視点から地域輸送・観光輸送の双方を踏まえ検討する。

研修先・日程

9月11日 函館市青函連絡船記念館摩周丸
9月12日 新函館北斗駅・上磯駅
函館市企業局交通部

写真①摩周丸のガイドツアー。②摩周丸の座席。③操舵室全景。④摩周丸の甲板にて。⑤道南いさりび鉄道に乗車。⑥上磯を散策。⑦箱館ハイカラ號の貸切利用。



●総括

2部藤田ゼミの地域研修では函館市を中心とした公共交通機関にスポットライトを当てた地域研修を実施した。最初に訪問した「函館市青函連絡船記念館摩周丸」は青函連絡船として1988年まで運航していた摩周丸を保存・公開している施設であり、青函連絡船に乗務されていた方のガイドの下、当時の青函連絡船について、また、摩周丸の様々な装備や機器室について詳細に説明していただき、函館の公共交通で重要な役割を担ってきた摩周丸を当時のお話を伺いつつ見学できたことは、函館の公共交通の歴史的側面を学べる貴重な機会となった。翌日は新函館北斗駅・上磯駅を視察、その後に函館市電の取り組みを函館市電の職員の方に伺い、箱館ハイカラ號の貸切乗車を行った。

コロナ禍を経て、交通事業者の経営は大変厳しい立場に置かれており、利用促進の取り組みだけでは限界も見られるだろう。公共交通機関としてどのように今後も持続させていくか、住みやすい街にするにはといったまちづくりの視点も合わせて考えていく必要がある。

最後に函館市企業局交通部の廣瀬様、摩周丸でガイドを担当して下さった佐藤様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記

函館の観光と交通の現状

函館地域研修を通して普段の観光では感じる事ができない学びを多く体験する事ができました。公共交通機関が充実していて観光都市としても有名な函館市ですが、定住人口が増加せず市としても衰退が進行しています。加えて、新型コロナウイルスの影響によって観光地としての打撃も受けています。



金城 雄士
地域経済学科2年
札幌白石高校出身

今回の研修では、実際に公共交通機関の職員として働く人にお話を伺うことや実際に様々な公共交通機関を利用して肌で函館市や北斗市の魅力を感じることができました。実際にお話を聞くことで、市としての現状や課題を教えて頂き地域研修でしか得ることができない体験でした。ご当地で有名なグルメも沢山食べて、五感で楽しむことができた研修になりました。改めて、公共交通が観光にも深く関わっている事が分かりました。コロナ禍もあり衰退している現状ですが、北海道全体として公共交通の今後の発展に今後も注目していきたいです。

函館の公共交通の未来

私たちは「函館の公共交通機関の現在と未来」というテーマで地域研修を行いました。函館は地下鉄以外の公共交通機関が充実しています。私たちはその函館の公共交通機関を実際に利用し函館の交通機関の課題やこれからの利便性の向上にむけて考察、検討を行いました。函館市や近郊の北斗市は人口減少が進んでおり、コロナの影響もあり函館の公共交通は衰退しています。今や函館は日本の代表する観光都市として発展を遂げてきましたが、その現状は厳しいものとなっています。観光において、公共交通の充実というのは重要ですが、その前に地域の公共交通であることを忘れてはなりません。これから数十年先の未来を考えると、函館という観光都市を存続させるには公共交通機関の維持、つまり持続可能な公共交通機関の実現が必要不可欠です。そのために地域としての魅力の発信をし、暮らしやすい街づくりや定住人口数の増加を図る必要があると思いました。



坂元 凌河
地域経済学科3年
札幌静修高校出身

1部 古林英一ゼミⅠ

参加学生数 13名



古林 英一
地域経済学科
教授



前田一步園森林にて

自然環境の保護と利用 —— 国立公園満喫プロジェクト

研修地：弟子屈町・釧路市（阿寒）

● 研修目的

国立公園を含む自然公園の目的は自然の「保護」と「利用」および「生物多様性の保全」である。これまでは「保護」の面が強かったが、観光立国政策との関連から「利用」が強調されるようになり、その一環として「国立公園満喫プロジェクト」が企画され、阿寒摩周国立公園はその対象となっている。国立公園における「保護」と「利用」のあり方について学ぶことを研修の目的とした。

研修先・日程

- 8月29日 つつじヶ原自然探勝路、レクチャー：阿寒摩周国立公園管理事務所田中所長「国立公園満喫プロジェクトについて」
- 8月30日 川湯清掃活動、釧路川源流カヌー体験、カムイルミナ（阿寒温泉地区）
- 8月31日 レクチャー「前田一步園財団の活動」前田一步園財団新井田理事長、前田一步園財団保有林の見学、レクチャー「自然保護官の仕事について」日比野自然保護官

写真①硫黄山。②国立公園行政についてのレクチャー。③川湯での清掃活動。④川湯温泉のホテル。⑤屈斜路湖。⑥前田一步園の森林。⑦シカの食害防止ネット。



● 総括

阿寒摩周国立公園は第二次大戦前に施行された国立公園法に基づいて指定された歴史ある国立公園である。阿寒摩周国立公園管理事務所田中所長によるレクチャーでは、国立公園政策が、利用重視から始まったが、高度成長期は自然保護の側面が強くなり、観光立国政策により今日では再度利用が強調されるようになったことを学んだ。

国立公園満喫プロジェクトは国立公園利用政策のひとつで、阿寒摩周国立公園は川湯温泉地区の環境整備と阿寒地区での観光資源開発がおこなわれている。

研修では川湯温泉地区の環境整備活動のひとつである川の清掃活動を体験し、清掃活動の実態と意義を学ぶことができた。その後、カヌー体験を通じ、釧路湿原を形成している釧路川流域の自然景観・生態系について学んだ。阿寒温泉地区では、満喫プロジェクトのイベントであるカムイルミナを体験し、付近の森林保全に大きな役割を果たしてきた前田一步園財団の活動に関するレクチャーを受けた後、実際の森林を見学した。

以上の研修内容から、国立公園における保護と利用の両立の必要性和困難性の実態を学ぶことができた。

学生研修記



坂本 想真
地域経済学科2年
北嶺高校出身

地域研修で学んだこと

「環境経済論」を学んでいる私たち古林ゼミは、自然公園に興味を持ったため、阿寒摩周国立公園に行きました。

阿寒摩周国立公園は公園の大部分が亜寒帯性の針葉樹林を中心としている自然公園であり、阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖の3つのカルデラ湖がある自然豊かな土地です。しかし、最近ではカムイルミナによる観光客の増加と引き換えに、騒音と光量による動物への影響や、観光客が捨てるゴミなどによる自然環境の破壊が問題となっています。

今回の研修で実際に現地へ行って見て、雄大な自然環境や風景を守るためには、様々な課題や問題点などがあり、いろいろな対策や解決策を見出すことが大切だと感じました。

カムイルミナを体験して

私たちのゼミは、地域研修で阿寒摩周地域へ行ってきました。研修テーマとしては、「自然環境の保全と利用」です。地域研修前のゼミで「国立公園満喫プロジェクト」について学び、実際に体験してきました。阿寒摩周地域は観光地ではあるものの、実際には観光客が溢れているということではなく衰退して行っているように感じました。

川村 彩奈
地域経済学科2年
札幌東高校出身

阿寒摩周への集客手段として国立公園満喫プロジェクトの取り組みの一つである、「カムイルミナ」というものがあります。これは阿寒湖周辺にある森林部分を夜にライトアップし、ストーリーに沿ってコースを進んでいくというアトラクションでした。光量や音量が盛大で見応えがあるものではありませんでしたが、周辺の動物への影響という面を見ると環境保全が出来ていないように感じました。そのため、私たちのゼミでは、カムイルミナをどう改善していくかということを考えました。その結論として、カムイルミナを光量、音量を削減できる形にしたり、周辺に既にある活用されていないものを活用するという結論を出しました。

1部 古林英一ゼミⅡ

参加学生数7名



古林 英一
地域経済学科
教授



戸島湿地にて

コウノトリとの共生 研修地：兵庫県豊岡市

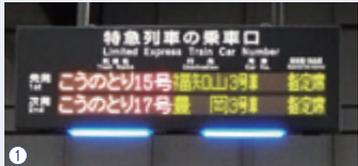
●研修目的

希少生物であるコウノトリの保護・繁殖を契機とした環境保全型の町づくりについて、その活動を学ぶ。

研修先・日程

8月23日	コウノトリの保護・増殖に関する施設見学とレクチャー 環境保全型農業の圃場見学とレクチャー
8月24日	豊岡市の靴産業についてレクチャー 湿地保全の現地見学と作業体験

写真①JR特急。②コウノトリの郷公園のコウノトリ。③コウノトリについてのレクチャー。④コウノトリ米(無農薬米)の水田。⑤戸島湿地の保全作業。⑥⑦城崎温泉街。⑧玄武洞。⑨円山川。



●総括

かつては全国的に生息していたコウノトリであったが、様々な理由から各地で姿を消し、兵庫県北部の豊岡市は国内最後の営巣地となった。絶滅を防ぐべく繁殖の試みもなされたものの、1971年にはついに野生のコウノトリは絶滅してしまう。

絶滅の原因はいくつかあるが、最終的には水銀物質を含む農薬の散布がおこなわれ、食物連鎖の頂点にたつコウノトリの繁殖能力が失われたことが大きい。

その後、1985年にロシアから贈られた幼鳥を豊岡市で育成・繁殖し、自然復帰せるプロジェクトが開始され、2005年には試験放鳥がおこなわれるに至った。コウノトリの主たる摂餌場所は水田で、水田に生息する小動物や昆虫が主たる餌となる。したがって、コウノトリが自然に生きるためにはそうした餌となる生物が生息できなければならない。つまり、コウノトリの生息には農法の転換が必要であり、減農薬・無農薬による稲作がおこなわれなくてはならない。コメの無農薬栽培は、一般的な栽培法に比べ、労働投入量が大きくなり、収量も小さくなる。無農薬米を「コウノトリ米」としてブランド化することで、この問題をクリアすることに成功した。さらに、豊岡市はコウノトリ共生課を設け、コウノトリをシンボルとする環境保全型都市をめざす町づくりをおこなっている。

本研修では、絶滅危惧生物の自然における保護・増殖は、単に増殖活動をおこなうだけでなく、地域の農業や市民の意識の構造転換が必要であることを学ぶことができた。

学生研修記

とにかく楽しい地域研修を終えて

私たちは環境保全と経済の共存ということを主眼として兵庫県豊岡市に行ってきました。現地に足を運んだからこそ得られたことばかりでとても有意義な時間でした。

最も驚きだったこととしては市民の方々の環境保全、コウノトリ保護の意識の高さです。それらは一般の市民が最前線に立って押し進めていくことが少ないものの、市民の方々の理解、協力がなければ決して成し得ないことで、豊岡市はその基盤がしっかりしていたからこそ、課題はありつつも、現状として上手いっていると強く感じました。

今後、豊岡に足を運ぶ機会があるかは分かりませんが、コウノトリの動向は今後も追っていきたいと思います。

地域研修を終えて

私たちは兵庫県豊岡市に行きました。豊岡市ではコウノトリの保護や野生復帰活動を行いつつ、コウノトリ育む米など経済面でもコウノトリと共生していくための活動を行なわれており、自然と経済の両立が目標とされています。

事前学習においてコウノトリが兵庫県や豊岡市と強いつながりがあると考えていましたが、実際に訪問すると地域住民の方々がコウノトリについて詳しく知っていたり、施設の職員の方の知識の豊富さなど、コウノトリが身近にあり、関わりもより深いということが伝わってきました。このように豊岡市ではコウノトリとの関わりが深いことを学びましたが、一部間違った認識があったり、市外や県外のコウノトリに関しての知識は浅いと考えるので、他県と協力してコウノトリについての知識を広めていくことが課題の1つになると考えました。



佐々木 鴻太
地域経済学科3年
札幌新川高校出身



三上 昂汰
地域経済学科3年
札幌清田高校出身

2部 古林英一ゼミ I・II

参加学生数6名



古林 英一
地域経済学科
教授



サロベツ湿原にて

国立公園における保護と利用の両立

研修地：幌延町・豊富町・稚内市

●研修目的

サロベツ湿原はラムサール条約登録湿地でわが国有数の面積があると同時に低地の高層湿原として貴重な生態系を維持しているところである。同時に、周囲は道内酪農業の中心地のひとつである。これまでは湿原を乾燥地化することで酪農を展開させてきたが、現在では酪農と湿原の共生がはかられている。産業と自然保護の両立の実態とその課題を学ぶことを研修の目的とした。

研修先・日程

- 9月5日 サロベツ原野の見学
自然ガイド嶋崎氏によるサロベツ湿原についてのレクチャー
- 9月6日 海岸清掃活動体験
稚内市南部丘陵地帯の見学
- 9月7日 豊富牛乳公社でのレクチャーと施設見学
豊富町酪農家の見学とレクチャー

●総括

サロベツ湿原は30数カ所あるわが国の国立公園のなかでは知名度の低い保護エリアであると思われる。しかしながら、サロベツ湿原は釧路湿原に次ぐ広大な面積をもつわが国でも屈指の湿原であり、ラムサール条約登録湿地となっているように、オオワシやオジロワシなど渡り鳥の飛来地でもある。気温が低いことから、低地でありながら、高層湿原の植生となっており、生態系の面からも重要なところである。

本研修では自然ガイドとして活躍している嶋崎氏からサロベツ湿原についてのレクチャーを受けるとともに、実際に湿原内を歩くことでサロベツ湿原の現状を学んだ。

また、短時間ではあったが海岸清掃をおこなうことで、海洋ゴミが大きな問題であることも実感することとなった。

豊富牛乳公社と山本牧場では、豊富町の酪農業の重要性和酪農と湿原の共生の試みを学んだ。

本研修は当初礼文島でのレブンアツモリソウなどの保全活動と観光利用を学ぶ予定だったが、天候悪化のために礼文島に渡るができなかった。しかしながら、その分、サロベツ湿原について深く学べた。

学生研修記

竹田 ひとみ
地域経済学科 2年
英藍高校出身



清水 菜摘
地域経済学科 3年
池上学院高校出身



自然との共生を学ぶ

今回の地域研修では、国立公園の利用と保護を学ぶ為利尻礼文サロベツ国立公園を訪れた。天候の関係で利尻礼文へ赴くことはできなかったが、サロベツ地区だけでも学ぶことは多かった。

サロベツ地区は日本で3番目に大きな泥炭地である。ラムサール条約に国際的に重要な湿地として登録されている地でもある。酪農が盛んな地でもあり、湿地と農地との共生が課題である。国立公園に制定されるにあたって、湿地の保護の為に農地を無償提供するなど地域住民の協力があって自然が保護されていた。

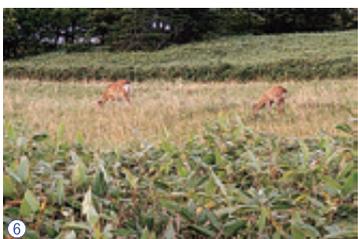
持続可能な自然を守る為に地域住民の協力が不可欠だ。ただ、地域住民の生活の場でもある為、生活を守る事も大切である。自然と生活、いかに折り合いをつけお互いが共存していけるかが最重要課題であると思った。

地域研修を通じて感じたこと

今回私たちは国立公園に指定されているサロベツ原野のある、幌延町と豊富町を訪れました。

実際に訪れてみてまず目についたのが、湿原と海岸の間に立ち並ぶ風車でした。この風車には、バードストライクや原生砂丘への問題などもありますが、私が特に気になったのは景観への影響です。サロベツ湿原内を散策すると、真っ直ぐと伸びた木道の先に利尻富士が見えるところがありました。しかしこの利尻富士の手前に複数の風車があり、広大な自然の中にまばらに人工物が並んでいたところが、印象的な光景でした。また、湿原と農地が隣接する豊富町は、その共存のために農家をはじめとした地域住民の協力が不可欠であることを学びました。国立公園と酪農は共に、豊富町にとって重要な地域の特色です。今回の研修で、自分の住む町のためにその地域全体で話し合い、互いに協力して目標に取り組むことが重要なのだと実感しました。

写真①泥炭層の標本。②泥炭を原料とした土壌改良材。③サロベツ海岸の清掃作業。④利尻礼文サロベツ国立公園のレクチャー。⑤放牧地の風力発電施設。⑥増えるシカ。⑦豊富町の酪農。⑧牧草。



1部 水野邦彦ゼミ I・II

参加学生数 21 名



水野 邦彦
地域経済学科
教授



大学にて

北海道の囚人労働・外国人労働の歴史をたどる

研修地：月形町・当別町

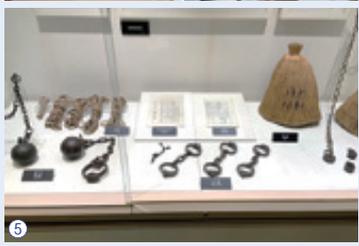
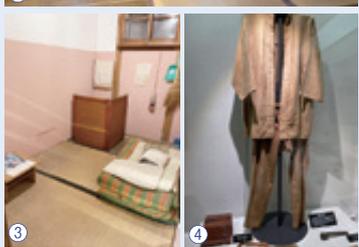
●研修目的

「北海道の和人の歴史は流刑囚から始まる」といわれるとおり、移住民や屯田兵が入植するに先立って開拓の基礎整備にあたったのは囚人たちであった。過酷を極め非人道的であった囚人労働の実態を学ぶべく、ゼミでは月形樺戸博物館（旧樺戸集治監）を訪れた。

研修先・日程

9月23日 月形町・樺戸博物館
月形町・篠津山霊園（囚人墓地）
当別町・劉連仁生還記念碑

写真①樺戸集治監内の建物。②③囚人たちの居室。
④囚人たちの服。⑤囚人の手や足の拘束具。⑥囚人墓地。
⑦囚人墓地の碑。⑧劉連仁生還の地。



●総括

和人による北海道「開拓」は、囚人を労働に駆り立て、道路を建設し耕作地を開拓するところから始まったが、その囚人収容の拠点が月形町の樺戸集治監であった。極寒の冬にも強行された各種工事は苛酷を極め、多数の囚人が死亡していった。のちに集治監は空知・釧路・網走にも建設され、囚人たちの手で上川道路・網走道路などが開鑿されたが、これらの道路は北海道内の基幹道路となっている。

囚人労働は、のちの朝鮮人労働とともに、今日の北海道の形成に大きな役割を果たしたが、労働者に甚大な犠牲を強いるものであった。ともすれば忘れがちな北海道近代史の裏面を学ぶべく、ゼミでは囚人労働および集治監に関する痕跡や資料がみられる月形町において研修をおこなった。

一行は樺戸博物館で、月形町教育委員会の野本和宏主幹の懇切丁寧なご案内ご説明を受けつつ、館内の貴重な展示物を見学したのち、収監中に死亡した囚人たちの眠る「囚人墓地」を訪れた。つづいて当別町に向かい、中国から道内に連行されてきて炭鉱で労苦を強いられていた劉連仁さんが脱走して13年間も山中に隠れたあげく町民に発見されたという生還記念碑の前に、ゼミ学生の報告を聞いた。

学生研修記

清水 秀斗
地域経済学科 2年
江別高校出身



血の滲むような囚人の労苦を記憶する

地域研修で月形町を訪れた。そこは、かつて樺戸集治監という監獄があった地である。「開拓により更生を促す」という伊藤博文の意見にしたいが、この集治監には自由民権運動により逮捕された政治犯や無期懲役犯を本州から輸送し、北海道の開拓をさせるという目的があった。集められた囚人の労働力は広大な原野の開墾や農作業にあてられるはずだったが、道路建設などの苛酷な土木工事に向けられることも多く、しかも囚人たちは足に鉄丸をつなげられたままこの重労働を強いられた。当然のように囚人たちは体を悪くし、命を落とすことも多々あったという。のちに道内の集治監は樺戸のほか空知・釧路・網走・十勝にも設置され、炭鉱開発をはじめとする各地の囚人労働の拠点となった。

現在の北海道があるのは、これら集治監の囚人たちの血の滲むような働きがあったからこそであり、囚人であることと関係なく、この労苦を記憶に留めることが大切だと強く感じた。

見田 泰昌
地域経済学科 3年
札幌北陵高校出身



北海道開発と囚人労働の歴史

今回、私たち水野ゼミは月形町樺戸集治監を中心に3つの場所を訪れた。昨年我々は幌加内町朱鞠内を訪問し、1930年代から本格化した外国人強制労働の実態を調査したが、今回は、『外国人強制労働以前の北海道開拓史を学ぶ。』という目的のもと私たちの暮らす北海道がどのような歴史をたどって発展していったのかに焦点を当てて調査を行った。

1881年から本格化した北海道開発は、屯田兵の他、本州から連れてこられた政治犯を含む、懲役12年以上～無期懲役の『囚人』たちによって行われた。北海道開発における最重要課題こそが一次資源の確保であり、地方中枢都市を結ぶ大道の建設等が急ピッチで進められた。北海道にまっすぐな道が多いことには、最短距離で道路を作るという当時の事情があったのである。そしてそれらの多くは今尚、私たちの暮らしを支えている。

北海道開拓150周年が謳われて間もない今、歴史の陰に埋もれた功労者たちの存在を私たちは学び、認知しなければならぬと感じた。



1部 水野谷武志ゼミ I・II

参加学生数 18名



水野谷 武志
地域経済学科
教授



函館市役所前

ふるさと納税制度による地域活性化の可能性と課題

研修地：函館市

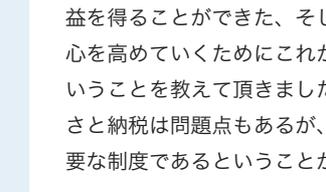
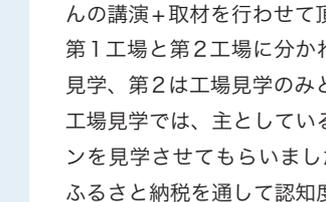
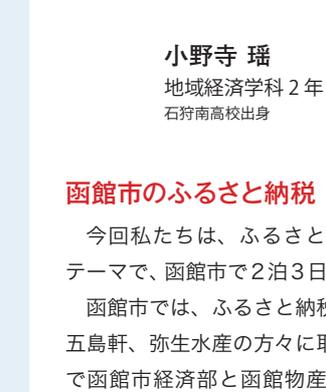
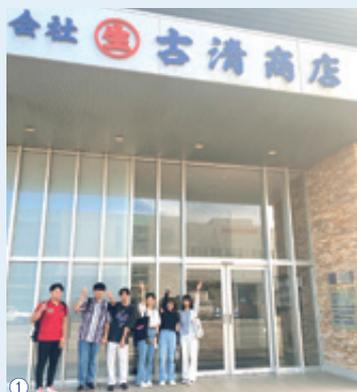
●研修目的

2008年に始まったふるさと納税制度は、幾度の制度改正を経てはいるものの現在では、多くの地方自治体で実施され、定着しつつある。そこで本研修では函館市を事例に、ふるさと納税制度による地域活性化の可能性と課題について考える。

研修先・日程

8月31日 函館市南茅部地区をまち歩き
古清商店
9月1日 函館市役所
函館山
9月2日 五島軒第1工場・第2工場
弥生水産
函館市中心市街地をまち歩き
帰礼

写真①古清商店玄関前。②函館市職員による講演。
③函館市職員と一緒に。④函館山山頂にて。⑤五島軒第1工場見学で白衣に着替える。⑥五島軒第1工場前。⑦五島軒第2工場長と副工場長と一緒に。



●総括

函館市職員の講演によって、ふるさと納税制度に市が本格的に取り組み始めたのが2017年度と比較的最近であったこと、しかしその後、ふるさと納税ウェブサイトを活用して申込み方法を拡充させ、返礼品として大ボリュームの鮭の切り身セットを導入して人気となったり、市内の宿泊施設、飲食店、観光施設で利用できるしゅみを返礼品として導入する等、毎年工夫と努力を重ねてふるさと納税制度による寄付金を集めることに成功してきたことを学んだ。寄付金の使い途として函館市に特徴的なのは、大間原子力発電所の建設凍結を求めて市が係争を続けている裁判費用である。

返礼品提供者を訪問し、施設見学や意見交換を通じて、ふるさと納税制度による注文が会社や商品の知名度を上げるだけでなく、売上げの増加にも貢献していることがわかった。一方で、最近の物価高騰によって返礼品の質を保つことに苦心していることも知った。

地元業者の売上、函館市への観光促進、市の財政等にプラスの影響を与えている点で、ふるさと納税制度が地域活性化につながる具体的な現場の一部を確認し理解することができた。返礼品提供者と函館市の協力関係を維持し、さらに発展させていけるかが今後の課題になると感じた。



弥生水産代表取締役と一緒に

学生研修記

小野寺 瑠

地域経済学科 2年
石狩南高校出身



函館市のふるさと納税

今回私たちは、ふるさと納税と町おこしというテーマで、函館市で2泊3日の研修を行いました。

函館市では、ふるさと納税返礼品業者の古清商店、五島軒、弥生水産の方々に取材、そして函館市役所で函館市経済部と函館物産協会それぞれの職員さんの講演+取材を行わせて頂きました。五島軒では、第1工場と第2工場に分かれ第1は質疑応答+工場見学、第2は工場見学のみとして取材を行いました。工場見学では、主としているカレー製品の製造ラインを見学してもらいました。五島軒への取材で、ふるさと納税を通して認知度や売りに繋がりに利益を得ることができた、そして函館市と五島軒の関心を高めていくためにこれからも続けていきたいということを教えて頂きました。研修を通して、ふるさと納税は問題点もあるが、町おこしという面で重要な制度であるということが分かりました。

福田 里奈

地域経済学科 3年
旭川南高校出身



返礼品生産者—古清商店

私たちはふるさと納税による地域活性化をテーマに、函館市に研修として向かいました。函館市役所での聞き取り調査に加えて、ふるさと納税の返礼品生産者へ聞き取り調査を行いました。

古清商店では、鮭の切り身など非常に人気の返礼品を生産しています。人気を維持するために工夫していることは、普段買えないような厚さや切り方を意識しているとのことでした。しかし、原材料高騰に伴う内容量の変更、日用品が返礼品として人気になっていること等で、出荷量は減少しているとお聞きしました。そこで、古清商店は、他とは違った返礼品を生産する、商品数を増やすなどの工夫を行っていました。

実際に返礼品生産者の方にお話を伺ったことで返礼品生産者からの目線を知ることができ、ふるさと納税に対する理解が深まった良い研修になりました。

1部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 20名



宮入 隆
地域経済学科
教授



厚沢部町の宿泊施設前にて

道南複合農業地域の現状と未来

研修地：厚沢部町

●研修目的

多種多様な経営形態が混在する道南地域（渡島・檜山）の中でも、農業基盤に恵まれ、「メークイン発祥の地」として有名な厚沢部町を事例に、複合農業地域としての現状と課題を農業者、農協、自治体などの実態調査を踏まえて明らかにする。

研修会・日程

- 8月24日 厚沢部町役場農林課
- 8月25日 JA 新はこだて厚沢部基幹支店
厚沢部町農業振興公社
- 8月26日 相良農園
前田農園

写真①JA集出荷施設にて。②ブロッコリー出荷見学。
③昼食風景。④農業公社の説明を受ける様子。⑤防除用ラジコンヘリ。⑥アスパラハウス前にて。⑦廃校を活用したカボチャ貯蔵施設。



●総括

厚沢部町は地域全体として、多様性に富んだ複合農業地帯を形成している。1970年代以降、コメの減反政策の影響を受け、労働集約型作物の野菜を中心に転作対応が図られたが、その後、地区ごとの土地条件に合わせて、小麦等の土地利用型作物の導入や大規模露地野菜経営の展開などもみられ、総体として多種多様な経営体を抱える地域農業として存立している。

厚沢部町で有名なのは町と農協が出資して1993年に設立された農業振興公社の存在である。当時、第三セクター方式で営農支援を行う組織は道内に類がなく、先進事例として注目された。30年後のいまでも同様の形で事業を継続していることが、力強く地域農業を支えてきたことを物語っている。公社調査で高度な技術に裏付けされた作業支援の実態を垣間みたゼミ生達は、オペレーター人材の育成が重要課題であることを調査結果の1つとして挙げている。

研修調査を通じて、多様な担い手と農業形態が存在する複合農業地域では、個別経営にしても、農協やその他の営農支援組織にしても、各場面において多様な人材が必要になることが明らかになった。さらに、その多様な地域農業を1つの産地としてまとめることも重要であり、自治体や農協など関係機関が一体化して支援する意義についても考察している。

学生研修記



山形 瑠菜
地域経済学 2年
苫小牧南高校出身

工夫と努力から見てくる地域の魅力

厚沢部町はメークイン発祥の地として有名ですが、現在ではアスパラ、ブロッコリーなど他の野菜生産も盛んです。もともと稲作地域でしたが、いまでは米、野菜、畑作物を組み合わせ、基幹部門と複合部門の割合が各経営で異なる多様な経営が存在していることが厚沢部町農業の大きな特徴です。地域研修での調査を通して、コメの減反政策や労働力不足、土地条件の相違などの影響を受けて、段階的に地域農業の複合化が進んだことがわかりました。

私は地域研修に行く前は厚沢部町のことを全く知りませんでした。正直に言うと、名前すら聞いたことがなかったです。しかし、研修で役場や農協の職員の方や農家さんから厚沢部町が行っている独自の取り組み、地域を元気にする工夫、先端技術を取り入れた農業のお話などを聞いて、厚沢部町の魅力をたくさん知ることができました。まだ知らない道内市町村についてももっと調べてみたいと思いました。



鈴木 草詞
地域経済学科 2年
小樽潮陵高校出身

多種多様な人材の確保に向けて

私たちは複合農業地域の実態を探るため、道南の中でも農業が盛んな厚沢部町にて研修を行いました。複合農業地域である厚沢部町では、他の地域と同様に労働力不足が問題となっていますが、多様な農業が存在し、人口減少も著しく、単に農業者や圃場で働く労働者だけではなく、自治体や農協、公社など営農を支援する各組織でも、多様な人材の確保が必要であることがわかりました。この状況は全道の農業問題としても捉えることができ、この課題の解決することは、いまや北海道農業の未来を考えていくうえでも重要です。私が特に興味を抱いたのは、農業振興公社の農作業支援事業でした。現在は農協から出向した少数精鋭の職員が、農業機械やラジコンヘリを操縦し、オペレーターとして作業受託を行っています。こういった事業を継続していくためには、今後、公社自身が人材を確保し、育成していく必要があると考えました。これからもどうなるか注目していきたいです。

2部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数8名



宮入 隆
地域経済学科
教授



西原農場にて

大規模経営集積地域から考える北海道農業の課題

研修地：上士幌町

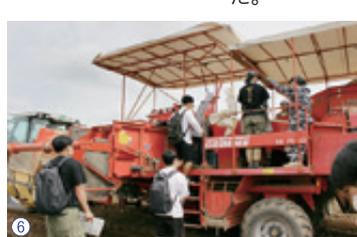
●研修目的

酪農メガファームや畑作経営を中心に道内有数の大規模経営が集積する十勝振興局管内の上士幌町を事例に実態分析を行い、今日的な大規模経営の存立条件と地域的支援のあり方を明らかにし、そこから北海道農業に特有な課題の析出を行う。

研修先・日程

8月29日 上士幌町農林課
JA 上士幌町営農振興部
8月30日 (南)西原農場
(株)サンクローバー

写真①上士幌町役場での研修風景。②JA 上士幌町での調査。③JAのキャベツ集荷施設にて。④畑作経営の圃場にて。⑤馬鈴薯圃場にて。⑥馬鈴薯堀取り見学。⑦ロータリーバーラー。



●総括

上士幌町は大規模畑作地帯にありながら、気候的・地形的条件不利ゆえに、個別経営の規模拡大と同時に、畑作から酪農主体の地域農業へと再編された。事例として取り上げた畜産クラスター事業が象徴するように、地域一丸となって農業振興に努めてきた結果、大規模経営を支えるTMRセンターやバイオガスプラントの設置、コントラクター事業を梃子とした飼料作物の生産拡大や耕畜連携の推進など、経営間の有機的繋がりも含めて、あたかも地域農業全体が巨大な装置産業へと変貌を遂げ、生乳生産量の増大を実現した。つまり、大規模化した個別経営も、それを支える営農支援の各種事業も、それぞれが巨大なシステムの一翼を担う存在になっているのである。

このような実態を捉え、宮入ゼミの学生たちは、地域農業の維持・発展の最重要課題を、地域全体で営農支援事業も含めた「次世代への継承」を考えることだと結論づけた。具体的には、後継者育成と経営委譲はもとより、次世代の事業の担い手までも見定め、個別ではなく「地域で育てる」方向に切り替えていくということである。この方向性は、自治体・農協などが一体となって条件不利を克服し、地域農業の振興に努めてきた北海道に共通する課題であると考察した。

学生研修記

川口 優奈
地域経済学科2年
奥尻高校出身



地域振興と深い繋がりを持つ農業の継承

私たちは上士幌町で研修を行いました。研修を通して農業の発展が地域全体の振興と深い繋がりを持つことを改めて実感しました。

日本一の広さを誇る公共牧場「ナイタイ高原牧場」は子牛の育成を担っていますが、町を代表する観光資源でもあり、家畜糞尿を処理するバイオガスプラントは地域への電力供給を行い、また、生産された畜産物はふるさと納税の返礼品として地域を支える存在にもなっています。飼料作物の増産で自給粗飼料を町内で賄っていることなど、地域内で資源循環が行われていることにも感動しました。

まさしく持続可能な農業のあり方を示す一方で、規模拡大したがゆえに経営継承がより深刻な課題であることも分かりました。研修を通して、北海道農業の課題は巨大な装置産業となった地域農業や個別経営をどのように継承していくのかということだと考察しましたが、これからも地域経済との繋がりを軸に、農業の継承問題について考えを深めていきたいと思っています。

中村 瑞紀
地域経済学科2年
札幌琴似工業高校出身



大規模経営の集積に成功した地域の課題

研修で私が調査したJA 上士幌町が行っていた印象的な取り組みは2点あります。第1に、畑作経営のために派遣会社を通じて雇用人材の確保や作業請負事業による営農支援と、第2に、酪農経営のために、子牛の世話などの受託をJAが運営する施設が行い、経営の負担軽減を行っていたことです。このような様々な営農支援を実施してきたことで、離農が減少し、生乳生産量の拡大に成功し、JAの販売実績は道内でトップクラスとなっていました。

経営規模拡大の一方で、農業の持続可能性という視点からみた場合、経営をどのように継承していくかが今後の上士幌町農業の課題となっていくことが分かりました。地域全体で生産発展に努めてきたのですが、これからの後継者の育成も検討していく必要があります。この問題は規模拡大を実現した北海道農業全体にも共通すると考えられます。私は今回の研修から、次世代の農業の後継者不足を解消する方法を見出していかなければならないと実感しました。

1部 山田誠治ゼミⅠ

参加学生数 13名



山田 誠治
地域経済学科
教授



かみしほろシェアオフィスにて

上士幌町のデジタル技術を活用した 取り組みの調査

研修地：上士幌町

●研修目的

ゼミでは、デジタル技術による地域活性化の学習を積み重ね、先駆的にデジタル技術の活用を発信している上士幌町を研修先を選びました。具体的な取組として、ドローンの活用、自動バス運転の試験、ワーケーションとシェアオフィスの実際と課題を調査対象に訪問してきました。

研修先・日程

- 9月15日 バス移動、上士幌町役場集合、Night Hawksにてドローンの活用状況を解説、かみしほろシェアオフィスの見学、上士幌町鈴木課長からワーケーションの実情と課題の解説、カミシホロホテル見学
- 9月16日 かみしほろ情報館見学、道の駅かみしほろ訪問、森のトロッコ・タウシュベツ展望台見学、バス移動

写真①森のトロッコは上士幌ならではの観光スポット。②Night Hawksのドローンでの説明。③待機中の自動運転バス。④かみしほろシェアオフィスは牧場と山に囲まれ。⑤シェアオフィスで鈴木課長から解説。⑥カミシホロホテルのチェックインは顔認証。⑦道の駅かみしほろは街の中核施設。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

●総括

ゼミ生は、まずドローンを物流の効率化と農村部を繋げる手段として活用する試みを行い、また夜間の捜索支援サービスを追求するNIGHT HAWKSの取組を聴いた。さらに救済を競う山岳遭難救助ロボットコンテストが毎年企画され、高度な技術を活用してドローンショーを開催するなどの取り組みを知り、ドローンの応用分野が地元の活気を支え、今後の可能性を実感したようだ。

また、既に実証実験が行われている自動運転バスについても、その制度上の課題がありながら、住民たちの足や移動診療所としての利用も考えていることを聴き、強い関心をもったようだ。

さらに、産業の基盤につながるシェアオフィスの「かみしほろシェアオフィス」を訪問し、役場の解説を聴き、強い印象をもったようだ。広大な畑に位置し、窓からは日本一広い公共牧場や東大雪の山々を望むことができるオフィスで、都市部企業のリモートワーク・ワーケーションの促進と働き方改革が期待できると思ったようだ。こうしたサテライトオフィスや人材誘致の結果、地元農業と企業とのつながりも実現し、ワーケーションによる施設の利用の状況などについても聴いて、小さな町でも志高く柔軟に取り組んでいる姿に、いろいろな可能性を感じた研修であった。

学生研修記



今田 大介
地域経済学科2年
札幌北陵高校出身

小さい町だからこそよさ

上士幌町は北海道十勝地方の北部、河東郡にある町で、人口が5000人弱の小さい町です。小さい町と聞くと、どこか活気のないように感じます。しかし、上士幌町は小さい町だからこそ、考案から実行までがスムーズに行われ、さまざまな取り組みにチャレンジする活気にあふれた町でした。

その代表的な取り組みはドローンです。ドローンは運搬のみならず、ドローンショーなどの観光資源としても活用されています。また、これらの取り組みにはふるさと納税で得た資金が利用されるなど、良い経済の循環を見ることができました。今後、ドローンの規制緩和が進むことを考えると、これまでの取り組みにはとても大きな意味があると感じました。他にも、ICTによる地方創生を目指す上士幌には、他の先進的な町に引けを取らない取り組みが行われています。小さい町だからこそその行動力は、高齢化や過疎化で悩む地方自治体の手本となると感じました。



葛西 瑚夏
地域経済学科3年
中標津高校出身

強みを生かしたまちづくり 上士幌町とDX

山田ゼミは北海道十勝地方北部にある上士幌町を訪れ、DX(デジタルトランスフォーメーション)の取り組みについて調査しました。DXの取り組みの核となるのがドローン事業です。ドローン事業といっても様々で上士幌町では夜間の捜索支援サービス、物の配送運搬、ドローンショーなどが行われています。今回は捜索支援サービスに使われているドローンを実際に見せていただくことができました。まだまだ乗り越えていかなければならない課題がたくさんありますが、もっと実用化が進めば町自体にも良い影響をもたらすのではないかと感じました。

また、上士幌町ではワーケーション施設も充実しています。「かみしほろシェアOFFICE」という施設は広大な自然の中に位置し、落ち着いて仕事ができる環境が整っていました。実際に都市部企業と上士幌町の住民がシェアオフィスでマッチングし、商品化につながったというお話も聞かせていただきました。さらには上士幌町では自動運転バスが町を走るなど、興味深い取り組みがたくさんありました。その数々の取り組みがさらなる大きな成果を上げていくことを期待しています。

1部 山田誠治ゼミⅡ

参加学生数 14名



山田 誠治
地域経済学科
教授



沖縄コンベンションセンター前で

沖縄のリゾテックの見学とデジタル化の到達

研修地：沖縄県宜野湾市・沖縄市

●研修目的

山田ゼミでは、デジタル技術と地域活性化をテーマに学習を積み上げ、今回の研修は北海道と観光のDX化などで、ある意味共通な課題をかかえている沖縄を訪問し、地域ぐるみで推進している「リゾテック沖縄」展示会を訪れ、また沖縄市のDX推進計画の取組から学ぶこととした。

研修先・日程

11月15日	航空機にて成田経由で移動。那覇市内を散策。
11月16日	沖縄コンベンションセンター（宜野湾市）で「リゾテック沖縄2022」に参加。北谷町アメリカンビレッジ散策。
11月17日	沖縄市役所訪問。沖縄市DX推進計画の解説。コザ商店街散策。
11月18日	航空機にて帰札

写真①賑わうリゾテック沖縄の会場。②観光DXはこれからでした。③沖縄の新しいキャラクター「根間うい」。④アバター展示の紹介に魅入る。⑤スマホ地域案内のアプリの解説。⑥北谷町アメリカンビレッジの海岸。⑦これが国際化しつつあるコザ商店街。⑧沖縄市役所は11月も暑かった。



●総括

訪問したリゾテック沖縄とは、「Resort」と「Technology」を掛け、リゾート地沖縄のあらゆる産業をデジタル技術で支え、生産性や付加価値を向上させるテクノロジーという意味である。そこは、IT産業と他産業のビジネスマッチングの場であり、沖縄県内で取り組まれている実証事業等の活動成果報告の場であり、様々なデジタル技術の応用の展示を見て、学生たちは強い印象を持ったと思う。企業による展示の中心なので、提案はされているものの、ではそれが実際に沖縄の地域経済や観光にどんな効果を発揮するのか、そのイメージが、技術に目が行きがちなため、なかなか見えにくかったとも思う、実際、学生たちも様々な展示に触れ刺激されたところもあるが、地域の人にどのような影響があるか、まで質問できるまでには至らず、フラストレーションが溜まったのかもしれない。

翌日に訪ねた沖縄市役所では、沖縄市のDX推進計画についての概要を聞いてきたが、まだまだこれからという点もあり、もう少し具体的な事例を知ることができれば、と惜まれたところである。しかし沖縄という土地の空気と、そこで活動する人々と接することができ、色々な学びになったことは疑い得ない。

学生研修記

リゾテック沖縄が与える影響に期待



前田 美優
地域経済学科3年
札幌新川高校出身

今回参加した「ResorTech EXPO 2022 in Okinawa」では、リゾート地である沖縄の観光産業がテクノロジーによってどのように支えられ、付加価値の向上につなげられているのかということを知ることができました。このイベントを通し、沖縄県内の数多くの企業が観光におけるテクノロジーの活用に取り組み、県全体で観光に力を尽くしているということを実感しました。そう感じたものの一つに、ARグラスがあります。このARグラスを着用すると、遠隔からでも同じ視点を共有することが可能となり、遠隔の観光客が見たり触っている商品に対して、直接触ることなくリアルタイムで商品説明を行うことができるのです。沖縄で観光におけるデジタル化が進んでいくことは、日本全体に刺激を与え、国内の観光産業に大きな影響を与えるのではないかと考えさせられました。沖縄ならではの熱気と若さを実際に肌で感じ、今後の沖縄により興味が湧き、この地域研修を経て期待が大きくなりました。

沖縄におけるデジタル技術と企業の取り組みに関心



阿部 竜也
地域経済学科4年
稚内高校出身

私たち1部3年山田ゼミⅡは、那覇市にある沖縄コンベンションセンターで開催されたリゾテック沖縄と沖縄市役所に訪問し、沖縄県においてデジタル技術をどのように活用しているのか調査を行った。リゾテック沖縄では、SDGsや観光、地方自治体向けのソリューションやサービスなどを展示しており、沖縄特有のIT技術などが見られた。株式会社おきでんCplusCでは、沖縄県内10以上の市町村で離れて暮らす高齢者と家族をつなぐ役割をIT技術で果たしており、65歳以上かつ一人暮らし世帯の60%をカバーするなど、実証実験も行っている。このほかにも、予約から配車まで完全非対面に対応したレンタカー業界のDX技術など、観光でも活躍する技術が多く展示されていた。

また、沖縄市役所での調査では、民間企業と市役所の協働体制でDXを進めていくことや、シャッター街をコワーキングスペースとして貸し出し、IT人材の育成を進めていることが調査の結果として分かった。課題としては、民間と比較してリスクの面でDX導入が遅れていることが明らかになった。

2部

山田誠治ゼミ I・II

参加学生数 8 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



情報発信の拠点のかみしほろ情報館

上士幌町のデジタル技術を活用した 取り組みの調査

研修地：上士幌町

●研修目的

ゼミでは、デジタル技術による地域活性化の学習を積み重ね、先駆的にデジタル技術の活用を発信している上士幌町を研修先を選びました。具体的な取組として、ドローン技術、自動バス運転の試験、ワーケーションとシェアオフィスの実態と課題を調査対象に訪問してきました。

研修先・日程

- 9月15日 バス移動、上士幌町役場集合、Night Hawksにてドローンの活用状況を解説、かみしほろシェアオフィスの見学、上士幌町鈴木課長からワーケーションの実情と課題の解説、カミシホロホテル見学
- 9月16日 かみしほろ情報館見学、道の駅かみしほろ訪問、森のトロッコ・タウシュベツ展望台見学、バス移動

写真①森のトロッコは上士幌ならではの観光スポット。②Night Hawksのドローンの説明。③ドローンの組み立て。④ドローン山岳救済は「発見」「駆付」「救助」が課題。⑤かみしほろシェアオフィスで解説。⑥にっぽうの家はワーケーションとして快適。⑦ワーケーションは生活環境としても整備。



①



②



③



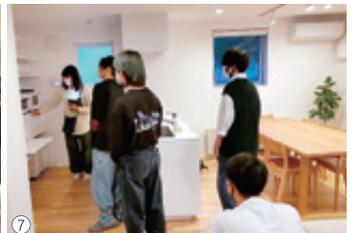
④



⑤



⑥



⑦

●総括

ゼミ生は、まずドローンを物流の効率化と農村部を繋げる手段として活用する試みを行い、また夜間の捜索支援サービスを追求するNIGHT HAWKSの取組について聞いた。さらに、救済を競う山岳遭難救助ロボットコンテストが毎年企画され、高度な技術を活用してドローンショーを開催するなどを知り、ドローンの応用分野の広がりや、注目を集めている効果に注目したようだ。

また、既に実証実験が行われている自動運転バスについては、機能的に新たな課題があり、またその制度上の課題もありながら、住民たちの足や移動診療所としての利用も考えていることを聞き、強い関心をもったようだ。

さらに、人口の増加につながるワーケーション施設にっぽうの家では、実際に宿泊体験を試みた。遠隔地の企業従業員が、リモートワーク・ワーケーションを通じて、一定の関係人口を築くことが期待でき、上士幌シェアオフィスとともに、こうしたサテライトオフィスや人材誘致をした結果、ドローンに続く若者の上士幌への定着が期待できる、と考えさせられたようだ。ドローンは既に各地で展開されており、競争が厳しくなる中、ワーケーションのより効果的なプロモーションが課題だと思ったようだ

学生研修記



近江 光子
地域経済学科 2年
札幌藻岩高校出身

デジタル化で挑戦するあたたかい町

今回、上士幌町ではデジタル技術を用いた地域活動について学ぶことが出来ました。役場のデジタル推進課ではドローンを積極的に活用しており、実物も近くで見せていただきました。これらは遭難者の救助や動物の追跡が可能であり、更なる実用化が期待されます。そして方向性を変えた取り組みとして300機のドローンを使ったクリスマスショーを開催したり、今年は物流ドローンで物を運ぶ実験の一例として牛の受精卵の配送に成功するなど今後の活用が期待が高まっています。その他にも自動運転バスを町内で運行するなど、他の市町村では見られない独自の取り組みを行っていました。

上士幌町はのどかで平坦な道が続き、町を歩けば小学生が笑顔で挨拶してくれる温かい町です。このような革新的な取り組みが出来る背景として、いい意味で人と人との距離が近く信頼できる関係が築けていることがひとつの理由としてあるのではないかと感じました。



八重樫 流星
地域経済学科 3年
札幌新陽高校出身

期待できるドローンの活用

上士幌町はデジタル技術の取り組みが盛んであり、今回の地域研修で自動運転バスとドローンについて学ぶことができた。自動運転バスについてはXBOXのコントローラーを使って操作を行うという特殊でユニークな構造になっていた。また走行するにあたり法律との兼ね合いなど課題も多いが自動運転バスには将来性があると思った。ドローンについては、物の運搬や熱感知で動物の姿をはっきりと発見したことがあるなど、既に活用事例もあるため、上士幌町においてドローンが担う役割は大きなものであった。

また、私が泊まった「にっぽうの家」は設計を無印良品が行っており、地域には企業や働く人が訪れることがあるため、企業やワーケーションで訪れた人向けの宿泊施設となっていた。デジタル技術を活用し、地域全体を活性化させながらワーケーションとしての取り組みを進めている上士幌町、研修を通して他の地域とは異なる素晴らしい地域になるのではという印象を持った。

地域研修報告会

2022年12月17日 15番教室、31番教室、32番教室、33番教室、34番教室、41番教室、50番教室、60番教室

地域研修では、学習成果を披露する場として「地域研修報告会」を設定しています。今年は12月17日(土)8会場で開催し、35グループが研修成果の報告を行いました。

今年の各ゼミの研修テーマは、買い物におけるキャッシュレス決済の展開状況、地域づくりの主体形成プロセスの調査、脱炭素や観光の観点からの地域づくり、DXによる地域づくり、漂着ごみやリサイクルに関する研究、地域新電力の実態や課題の追究、等、北海道や日本が抱える重要な地域課題に真摯に向き合ったものが多くみられました。また、報告を受けてフロアの参加学生との間で活発な質疑応答も行われました。

報告会に出席した学生の感想では、他のゼミの発表に対して、「スライドの見やすさ」「適切な質疑応答」「提案や考察が含まれている」などの感銘を受けたものが多くみられました。報告会は、相互に学び合い、刺激を受ける場にもなっていると思われれます。

経済学部では、現地研修時のコロナ感染症拡大防止対策を義務付けているため様々な制約下での研修とはなりましたが、準備過程から報告会に至る今回の経験は、今後の学修や社会生活にとって大きな糧となるものと思われれます。(浅妻 裕)

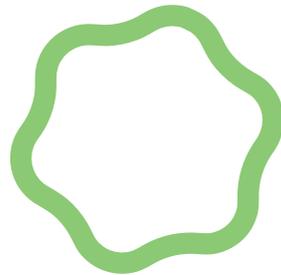
◎報告ゼミ順序と研修地

- **15番教室** [32名] 運営担当：大貝先生
①内田2部I・II (函館) ②上園2部I・II (ニセコ) ③古林1部II (兵庫県/豊岡) ④山田1部I (上士幌)
- **31番教室** [44名] 運営担当：中園先生
①古林1部I (弟子屈・釧路) ②宮入2部I・II (上士幌) ③上園1部II (鹿追) ④佐藤1部I (江別)
- **32番教室** [35名] 運営担当：西村先生
①大貝2部I・II (別海・中標津) ②濱田1部I・II (札幌) ③山田2部I・II (上士幌) ④浅妻2部I・II (室蘭)
- **33番教室** [45名] 運営担当：水野谷先生
①平野1部I (函館) ②古林2部I・II (豊岡) ③西村1部I・II (浦幌) ④佐藤信1部II (札幌) ⑤中園1部I・II・中園2部I (岩見沢)
- **34番教室** [42名] 運営担当：山田先生
①大貝1部I (帯広ほか) ②西村1部I・II (東川) ③平野2部I (札幌) ④水野谷1部I・II (函館)
- **41番教室** [66名] 運営担当：平野先生
①宮入1部I・II (厚沢部) ②大貝1部II (高知県/四万十ほか) ③川村1部I・II (札幌) ④濱田1部I・II (当別) ⑤藤田2部I・II (函館)
- **50番教室** [65名] 運営担当：宮入先生
①藤田1部II (函館) ②内田1部I・II (芽室) ③山田1部II (沖縄県/沖縄ほか) ④平野1部I・II (函館) ⑤水野1部I・II (月形・当別)
- **60番教室** [63名] 運営担当：水野先生
①浅妻1部I・II (福岡県/みやまほか) ②西村2部I・II・濱田2部I・II (沼田・釧路) ③藤田1部I (広島) ④上園1部I (豊岡)



北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2022



北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<https://www.hgu.jp/>

<https://econ.hgu.jp/>

2023年3月発行

制作(株)ラボット